

国連世界情報社会サミット 報告会

報告書

財団法人 日本障害者リハビリテーション協会

国連世界情報社会サミット 報告会

報告書

財団法人 日本障害者リハビリテーション協会

目 次

開催趣旨	3
プログラム	4
講師プロフィール	5
主催者挨拶	7
寺島 彰（財団法人 日本障害者リハビリテーション協会参与）	
講演 1	9
山根 耕平（社会福祉法人 浦河べてるの家）	
講演 2	15
須田 初枝（社会福祉法人 けやきの郷理事長）	
阿部 叔子（社会福祉法人 けやきの郷常務理事）	
講演 3	23
河村 宏（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所障害福祉研究部長）	
質疑応答・討論	31
参考資料	39

情報社会がはらむ諸問題を解決するための国際戦略を世界中の首脳が集まって協議し、行動計画を採択する世界情報社会サミットが12月10日から12日にスイスで開かれた。12日に開催された「世界障害者フォーラム」、障害者を含む情報弱者への配慮が明確に盛り込まれるのかどうかをめぐって折衝が行われていたサミット宣言および行動計画等、障害と情報社会の関わりについてサミットの意義に早くから注目し取り組んできた河村氏と、フォーラムのスピーカーである山根氏、須田氏、阿部氏が報告し、今後のすべての人にとってのICT（情報通信技術）の取り組みについて討議する。

日時： 2004年1月30日（金）18:00～20:30

場所： 日本財団2階大会議室（東京都港区赤坂1丁目2番2号）

主催： 財団法人日本障害者リハビリテーション協会

プログラム

日時：2004年1月30日（金）18:00～20:30

場所：日本財団2階大会議室（東京都港区赤坂1丁目2番2号）

次第：

- 17:30～ 受付
- 18:00～18:10 主催者挨拶・会議の説明
- 18:10～18:30 山根耕平氏 講演
- 18:30～18:50 須田初枝氏、阿部叔子氏 講演
- 18:50～19:40 河村宏氏 講演
- 19:40～20:25 質疑応答・討論
- 20:25～20:30 閉会



内容：

情報社会がはらむ諸問題を解決するための国際戦略を世界中の首脳が集まって協議し、行動計画を採択する世界情報社会サミットが12月10日から12日にスイスで開かれた。12日に開催された「世界障害者フォーラム」、障害者を含む情報弱者への配慮が明確に盛り込まれるのかどうかをめぐって折衝が行われていたサミット宣言および行動計画等、障害と情報社会の関わりについてサミットの意義に早くから注目し取り組んできた河村氏と、フォーラムのスピーカーである山根氏、須田氏、阿部氏が報告し、今後のすべての人にとってのICT（情報通信技術）の取り組みについて討議する。

講師：

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 河村 宏 | 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所障害福祉研究部長 |
| 山根 耕平 | 社会福祉法人 浦河べてるの家 |
| 須田 初枝 | 社会福祉法人 けやきの郷理事長 |
| 阿部 叔子 | 社会福祉法人 けやきの郷常務理事 |

司会：

- 野村 美佐子 財団法人 日本障害者リハビリテーション協会情報センター次長

主催：

- 財団法人 日本障害者リハビリテーション協会

講師プロフィール

●河村 宏 氏

国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所 障害福祉研究部長

国立身体障害者リハビリテーションセンター（NRCD）研究所、障害福祉研究部長。大学の理学部で地理学を学び、障害関係の活動及び障害問題について幅広い経験がある。国際図書館連盟（IFLA）の盲人図書館セクションの部長の経験があり、国際的なアクセシビリティの標準規格である DAISY の創始者かつ研究者でもあり、また国際協力機構（JICA）アジア太平洋障害開発センターの諮問委員会のメンバーと、障害分野の研修と就労、雇用に関する平等達成を目標とした世界的な研究・情報ネットワーク（GLADNET）のメンバーも務める。更に、ウェブ・アクセシビリティ・イニシアティブ/W3C の運営委員でもある。そして、日本の障害者のニーズに合わせて著作権法を改正する際に主導的な役割を果たし、発展途上国における DAISY の実施を支援し、アクセシブルな ICT の開発により、障害者のニーズに合わせて、災害の被害を軽減し、その準備と対応をすることに関する研究を行っている。ごく最近では、世界情報社会サミット（WSIS）の市民社会局で障害者グループの中心となって活動している。

●山根 耕平 氏

社会福祉法人 浦河べてるの家

1971 年 4 月千葉県に生まれる。

1996 年早稲田大学大学院理工学研究科卒業 機械工学専攻。

1996 年 4 月三菱自動車工業株式会社に入社。

2001 年 11 月浦河べてるの家に参加。

2002 年 2 月突発的な宇宙人の幻聴を聴くが、べてるの家の仲間達にミーティングを開いてもらって助けてもらう。

2002 年 5 月幻覚妄想大会でグランプリを獲得。

現在社会福祉法人浦河べてるの家OA事業部に所属し、日本各地で多数講演を行っている。

●須田 初枝 氏

社会福祉法人 けやきの郷理事長

社会福祉法人けやきの郷理事長、社団法人日本自閉症協会副会長。日本自閉症協会埼玉県支部顧問、全国心身障害児福祉財団理事、全国特殊教育推進連盟理事、全国社会福祉協議会・心身障害児者連絡協議会理事、埼玉県障害者プラン策定委員。文部科学省 ADHD、高機能自閉症児のためのガイドライン策定委員。1968 年、文部大臣賞受賞、2002 年、厚生労働大臣賞受賞。

なお、現在 44 歳になる自閉症の子どもの親で、日本自閉症協会の前身である日本自閉症児者親の会の発起人の 1 人（1969 年）で、以来、常務理事、副会長を歴任。けやきの郷設立発起人代表者であり、35 年にわたって、自閉症の人たち、また、その家族のための活動を行っている。

●阿部 叔子

社会福祉法人 けやきの郷常務理事

現在、社会福祉法人けやきの郷常務理事、社団法人日本自閉症協会運営委員、また、出版部副部長として、機関紙、指導誌、その他、「自閉症ガイドブック」等の出版物の出版に携わる。

1954年から1971年まで、東京放送に勤務。ディレクターとして、ラジオ番組の制作を行っていたが、障害の息子（現在41歳）の療育のため退職。以来、現在に至るまで、日本自閉症協会（当時・自閉症児者親の会）で、主として広報の仕事に参加。30数年にわたり、自閉症の人たち、その家族の人たちのための活動を行っている。また、東京都武蔵野市の武蔵野東小学校（自閉症児と健常児の混合教育を進める私立小学校）設立運動に関る。けやきの郷の設立に際しては発起人会の世話人。現在に至るまで、常務理事として活動。著書に、自閉症の子どもが事件解決に活躍する児童書「なぞの鳥屋敷」（金の星社。日本児童文芸家協会新人賞）ほか。また、わが子とのカナダ旅行を中心に書いた「合言葉はノープロブレム」（岩波書店）は、日本エッセイクラブ賞にノミネートされた。

財団法人日本障害者リハビリテーション協会参与 寺島 彰

私は日本障害者リハビリテーション協会情報センターで参与をしております寺島です。本日は週末のお忙しい中、国連世界情報社会サミット報告会にご参加いただき、ありがとうございます。

新聞報道でもご存じかと思いますが、国連世界情報社会サミットは、情報技術社会の将来像について協議するために、昨年12月10日から12日までスイスのジュネーブで開催されました。世界176カ国代表の参加があり、そのうち約50カ国は首脳が参加したと言われています。日本からは麻生太郎総務相がコメントを述べております。

今日、ICT(情報通信技術)は、障害のある方のための強力な支援手段であるという認識は既に共通の理解になっております。例えば、私は、以前視覚障害者の方の生活訓練を担当していましたが、最初は盲人かなタイプというものを教えておりました。この盲人かなタイプといますのは、かなタイプライターのキーボードや筐体の一部に突起物を貼り付けて、指先の触覚をつかって、視覚を使わずに文字を打つという訓練を行っていました。かなタイプですから、もちろん漢字は書けません。打った本人は、自分が正しい文章を作成したかは確認できませんでした。その頃には、視覚障害者の方は漢字かなまじり文は書けないという状態でした。それが約20年前に音声ワープロや音声パソコンなどが開発され、現在では、視覚障害者の方の多くが漢字を用いて文章を作成し、インターネットやメールを活用し、それを職業にしておられる方もたくさんおられます。

今日では視覚障害者だけでなく、聴覚、肢体不自由、さらには知的障害や精神障害をもつ皆さんもICTを活用して活動範囲を拡大されております。このように障害者は既にICTを活用している重要なグループであると言えます。このような中、昨年12月にデジタル・デバイド(情報格差)の解消やインターネット管理、知的所有権など、情報社会をとりまく問題を議論するための国連主催による世界各国の首脳による会議が開催されることになりました。それが、世界情報社会サミットです。この会議で採択されると思われる宣言や、行動計画に果たして障害者の議題が取り上げられるのかどうか、それが今後の障害者のICT環境を左右することは明らかで、それにいち早く着目し、この世界情報社会サミットに障害者問題が取り上げられるように世界的な障害者コミュニティ活動の中心になって組織、コーディネートしてこられたのが、本日、ご講演いただきます河村さんです。河村さんは、現在は国立身体障害者リハビリテーションセンターの所属ですが、昨年の6月までは本協会の情報センター長をされておられました。詳しいいきさつにつきましてはご本人からお話いただけると楽しみにしております。

また、その障害者コミュニティ活動の1つであり、2003年12月12日に同じジュネーブのパレクスポで開催されました「グローバル・フォーラムー情報社会における障害者ー」においてICTを活用した障害者支援の成功事例として、「精神障害者を支援するテレビ会議システムの開発とデジタル・アーカイブ」という発表をされました山根耕平さん。また、すべての人の

ためのICT設計と開発事例として、「自閉症と情報コミュニケーション技術支援」について発表されました須田初枝さんと阿部叔子さんにもご報告をいただきます。講師の皆さま方は、お忙しい中、遠方からおいでいただきました。感謝申し上げます。また会場をお貸しいただきました日本財団にも感謝を申し上げたいと思います。

最後になりましたが、国連世界情報社会サミットに関する情報は、本協会が主催しております障害保健福祉研究情報システムのホームページで見ることが出来ます。日本障害者リハビリテーション協会のホームページからたどっていくことができますので、参考にいただければ幸いです。長くなりましたが、どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

講演 1

社会福祉法人 浦河べてるの家
山根 耕平



ただ今紹介がありました、北海道の浦河町から来ました「浦河べてるの家」の山根と申します。

今回、世界情報サミットに参加してということで、まず、どのようなことからお話ししようかと思っていました。まず、参加して一番よかったと思ったことは、この写真にもあるように、世界中の人と交流が持てた、話をするのができた、仲間になることができたことが、いちばん大きな収穫だったと思っています。あとで、詳しくお話しますが、精神障害、心に傷を負ってしまった人たちは、他人と話をするということが非常に苦しい人が多く、べてるの家では話す練習、コミュニケーションする練習、ミーティングというものをたくさん開いています。みんな次々に、徐々にしゃべれるようになってきて、気持ちを伝えられるようになってきて友達ができます。友達ができると、自分のいままで伝えられなかった気持ち、壁を叩いたりすることでしか伝えることができなかった苦しい気持ちを苦しいよと言葉で伝えられるようになります。そして言葉によって伝えることの重要性をテレビカメラで、テレビ会議として伝えられるようにしたいという思いから作ったのが、今回発表する「べてるシステム」テレビ会議とデジタル・アーカイブのシステムです。こちらがなぜサミットで発表することができたかといいますと、河村先生が、昨年10月26日に浦河町に見学にいらっしゃった夜に懇親会があり、コミュニケーションの大切さを伝えたいと思っていろいろなものを作っていますという話をしたら「それを国連で発表しましょう。」と言われまして、この写真の右側に写っているのが、「ホクレンショップ」という浦河町でいちばん大きなスーパーです。僕はちょっと河村先生と席がはなれていて話がよく聞こえなかったのも、このスーパーのホクレンさんがスポンサーになってくれたのかな、町をあげて協力してくれるのかなと思ってしまったのですが、会議が終わってからよく聞いてみたら「ホクレン」ではなく「国連」だよと言われて、げ、それはホクレンよりはるかに大きなスポンサーだと驚いてしまいました。

僕らのドクターも川村先生というのですが、前回1,500人の方々に聞いてもらった講演会のときに川村先生が「次は武道館だ、わはは」と言われていたことがあったのですが「なんだか武道館を飛び越えて国連になってしまったけれど、いつもの通りで大丈夫だね。」と言われました。

発表内容については15分間と言う短い時間でしたので何を発表するか非常に迷いました。情報社会サミットということで、システムの話に重点をおけばいいのかと思い、河村先生にご相談したら、講演を聞きに来る人はいつものべてるの講演とは違って医療関係者や作業所関係の人ではなく政治家や実業家の人が多いから、そういう人達に分かるように、心の傷、心の病とはどういうものか、またそれにはどうすることが大切なのかを伝えたほうがいいと言われました。それでしたら大事にしているのは、コミュニケーションの大切さなのでそれを伝えたいとお話したところ、よし、それで行こうということになりました。システムの説明は最後にちょっとしますが、要は、システム、テレビ会議の中でどんなことを話し合っているかを報告して来ました。以下、サミットで使ったパワーポイントを日本語に訳したものを使います。

べてるの家は北海道の襟裳岬の手前の浦河町という小さな町にあります。主な産業は馬です。競馬の馬のほとんどは浦河町産の馬で、また海産物、昆布などが有名な町ですが、近年過疎化が進んでいます。そのような町の中で25年前に浦河の日赤病院から退院した人達がつくった「どんぐりの会」から始まりました。町のためにできることをやろうと。町の人に受け入れられるか分からないが、まず勝手にこっちから町のために出来ることをやろうと決め、商売をやろうということから始まったそうです。しかし商売をやろうと言ったはいいけれども、話し合いがないと、ミーティングがないと誰が何をやればいいのか、何を考えているかも分からないので、頻繁にミーティングが開かれるようになったそうです。その時いくつかスローガンができました。その中からこの3つを説明します。

1つは、安心してさぼれる会社づくり。安心してさぼるということは、安心してさぼっても仕事が止まってしまってはダメなのです。いわゆる今で言う、カッコいい言葉だと、「ワークシェアリング」と言うらしいのですが、自分が調子悪くて行けないときは、他に誰かメンバーにってもらおう。そのためには普段からコミュニケーションをとり、連絡をとっておかないと、いざというときに誰かが代わりになってくれないためにサボれない。安心してさぼれる会社づくりができる人は実は、コミュニケーションがうまくとれる人だ、とだんだん分かってきたそうです。「三度の飯よりミーティング」というのも、今の話と同じで、何か問題があったら陰口を言うのではなく、まずみんなで話し合おうと。最後の「手を動かすより口をうごかす」は、具体的には昆布の袋詰めなどでは、一生懸命昆布を詰めてばかりの人よりぺらぺらしゃべっている人のほうがどうも具合がよい、回復が早いと。一生懸命昆布を詰めて具合が悪くなるよりは、口を動かして自分の思いを伝えたほうがいいんじゃないかということで、手を動かすより口を動かすわけです。これはおとしにできた一番新しい標語です。

具体的なミーティング風景がこちらです(と言ってパワーポイントを示す)。これは毎朝やっている朝のミーティング風景ですが、朝出てきたメンバーがまず自分の体調を報告します。「今日は調子がいいので3時まで」「今日は調子が悪いので12時で帰ります」とみんなの前で報告します。その後、今日の仕事の打ち合わせになって、今日の昆布の注文はこれだけ、他の商品の注文はこれだけあるので今日は何をどれだけやるかをみんなで話し合っただけで、それから1日がスタートします。その1日の中でまた問題があったらまたミーティングをやるという形で1日がどんどん過ぎていきます。

私の場合、どうして「べてる」にたどり着いたかということですが、勤めていた会社がろくに試験もしないで危ないクルマを次々と世に送り出しているのを見て、これではいけない、安

全な車をつくろうとメールマガジンを自発的に社内に発行していたところ、まずグループの仕事を全部外されて、市場調査の仕事のみを命じられて、次に段ボールで隣の人との間に壁をつくられて隔絶されたり、職場の同僚や上司に「1人で会社を変えられるわけがないだろう。死んでしまえ。」などと悪口を言われ続け、最後は会社のセミナーで、パラダイムシフトと称して遺書を書かされて、両親、兄弟、恋人などにそれぞれ今までの自分は死にますという決意の遺書を書かされました。そして、これでいままでのあなたは死んだので、これからはずべて何をするにもしゃべるにも水を飲むのにも歩くにも、まず会社のことを中心として考えるように生まれ変わりましたという決意文を書いてくださいと言われ、夢遊病者のように決意文を書きました。それ以降は自分が動作を行う度に、これは会社にとっていいことか、悪いことか考えるようになってしまいました。そしてそのセミナーの最後に4つのグループが結論を模造紙に書いたのですが、なぜかその4つのグループが書いた結論は「中堅社員は会社のために自立して働くこと。」という同じ結論になりました。私はふらふらとその4枚の模造紙をもらって帰り、自分の部屋の四面に貼って「自立、自立、自立…」とぶつぶつ言っているところを、このままでは会社に殺されると母がべてるに連絡をしてくれて、まさにべてるにたどりつくような形で生活を始めました。

べてるで暮らし初めてからも、嫌がらせと普通の生活の区別がつかなくなっており、べてるにいる周囲の人たちもまた僕に脅迫してくるのではないかとびくびくしていました。しかし、2ヶ月くらい過ぎた頃、自分の家の周りで起こっていたような嫌がらせがべてるにはないことがわかってきました。家の周りでは玄関に落書きされるとか、ベランダの植木鉢が抜かれるとか、洗濯物が汚されるとか、母の通っていた幼稚園のプールに生ゴミが放り込まれて園児がプールを使えなくなるとか、幼稚園に「殺すぞ」という脅迫状が届いたり、また切り刻ざまれたり、撲殺されたり、内臓を引き出されたりしたウサギが何度も投げ込まれたりすることが会社での脅迫と同じ時期に発生していて、現実と被害妄想の区別がつかない状態でした。

べてるの人たちは自分が部屋で固まっているときも、「大丈夫か？」と声をかけてくれたり、苦しんでいるときも、言葉でコミュニケーションをとろうとしてくれました。そこでは見捨てられるのではなくて助けてくれる。全部を助けてくれるところじゃないのもまたミソなのですが、私も部屋の中で固まっていたとき、経験のあるメンバーは助けてくれなかったし、後で聞いたらちょっとぐらい固まっているのは自分で何とかするはずだと言われて厳しいなと思ったんですけど。確かに30分くらい固まっていた後で動けるようになったときは、自分の力で思考のループ状態から動け出せたというちょっとした自信になりました。つまりいろんな同じような経験をしてきた人たちのアドバイスの中で暮らすことで、ちょっとずつ現実と嫌がらせとの区別が付くようになってきました。

薬も飲んでいました。べてるにたどり着いたときにはうつ系の違う薬を飲んでいたのですが、浦河日赤病院で処方された統合失調症の新薬（SDA）を飲んでみると、恐れとかただ怖いというよりは、おなかの底からこみ上げてくるようなぞっとするような、殺されるかもというような恐怖感などがすごく少なくなるんです。それと同時に「うれしい」というような気持ちも薄れてしまうので、一緒に隣の部屋に住んでいるハヤサカキヨシさんという人の聞いても、こういう時は絶対に涙が出るだろうと思うときでも、統合失調症の新薬（SDA）を飲んでると涙が出ないときがあるけど、しょうがないなあ。こうしてみんなの中で暮らしているうちに、脅迫と日常生活の区別が自分できるようになったと思ひ薬を止めたんです。そうしたら5～6

日したところで、幻聴が心の中に黙っていても聞こえる声で、耳に指せんしていても聞こえる声なんですけれども「襟裳岬に来て地球と会社を救って」って声が聞こえてきたんです。これは一大事と思って、「ぜひ襟裳岬に行かせてくれ。」と言ったらミーティングが開かれました。みんなには、まあ急ぐな、冬の寒い時期の襟裳岬は氷点下10度近く、風も常に10メートルくらいのところで木も生えてないし草原だけのとんでもない所だけどおまえ行ったことないだろう、寒いしいいことないからやめとけてみんな言うけど、僕は「早く地球と会社を救って」って声が聞こえるからそんなのに負けているわけにはいきませんと。どうしても連れて行ってください、と言ったら、あるメンバーが「山根くん、気持ちはわかるけど宇宙船に乗るには、浦河では免許証が必要なんだよ。」と言われ、そんな話は聞いたことがなかったから、そんな話は信じられないと言ったんです。そうしたら多数決を取ろうということになってみんなで多数決を取りました。そうしたら僕以外のみんなが「免許証は必要」に手をあげたので、う～ん、浦河はそういう所なのかと思って、じゃあとりあえずその免許証を発行してくれるところに行きたいです。ところでなんというところで発行してくれるのですか？」って言ったら、「川村宇宙センターって所があるからそこへ行こう。」と言われたので、ふーん、どこにあるんだろうと思いながら車に乗って、着いたところが浦河日赤病院でした（笑）そこでDr.川村が待っていました。今までの話をしたら、川村先生はうんうんうなづきながら山根くんの気持ちはよくわかるけど僕より3年前に、同じく宇宙船に乗ろうとして2階の窓から転げ落ちて足を複雑骨折して大通りをはって病院にきた人があるんだ。だからちょっと今の山根君を襟裳岬に行かせるわけにはいかないの、ちょっと休んでいかない？ と言われて1週間入院しました。

そして入院してすぐの1日目2日目ぐらいにはみんながお見舞いに来てくれて、いやぁ襟裳岬なんて行かないでよかったね、昨日はだいぶ寒かったらしいよ。病院のほうは居心地いいでしょうとかいろんなことを言ってくれました。確かに冷静に考えてみれば、なににもないところしいし、「何もない春です」という歌もあったなと思ひ出しました。みんなにひきとめてもらって助かった、ほっとしたような安堵感というか、後ろめたさも含めていろいろあったのですが、それが2002年の1月のことです。

今、パワーポイントに映っている幻覚妄想大会の写真ですが、ベてるでは年に1回総会をやっています、その総会のときにその年で一番ユニークというか、みんなに関わりのある幻覚妄想をとった人にグランプリが授与される。これ以外にもいくつか賞があって、新人賞とかいろいろあるんです。僕はいきなりグランプリをもらいまして、もらった理由も川村先生曰く、「宇宙船を呼んだからあげるんじゃないよ。みんなに助けてもらったことを評価してのグランプリだからね。山根君一人だったら這ってでも襟裳岬に行っちゃったでしょう。」って言われました。そうだなあと思いながらも正直嬉しかったですね。それに次の日町を歩いていると「おめでとう」と町の人とかに言われて照れましたね。この授賞式には、ベてるのメンバーや町の人、日赤病院の人にも来ていまして、ふだん、このメンバーがどういうふうに感じて、どういうふうに行動して、それに対してみんながどういうフォローをしてミーティングしているのかなどという話ができるので、町の人との情報共有の場にもなっていると思います。

やっとなベてるシステムの話ですが、ベてるシステム自体は、テレビ会議と、デジタル・アーカイブの2本立てです。今パワーポイントに出ているのは日本のどこどこを結んでいるかという日本地図です。北海道から始めたので北海道は3カ所ありますが、あとは本州に何カ所も散らばっています。作業所や大学や商売をやっている方ともつながっています。話している内

容はミーティングなどもありますが、やはり始めは天気の話などから始まることが多く、たとえば北海道から九州・鹿児島に電話すると互いに着ている物がぜんぜん違って同じ季節とは思えないですね。

そして前に会ったことのある人なら、「その後どうしていましたか。こちらは元気にやるよ。」など普通の会話なのですが、相手の顔を見ながら話すというのは電話より随分違うのです。テレビ電話会議を皆さんも一回やってみると分かると思いますが、電話よりはるかにいろんなことが伝わるのがわかると思います。直接会うのに比べればちょっと落ちるかもしれませんが不思議な感じがします。何画面も並べられますけど、1画面ずつ、1対1で話している時はまだ普通に相手とコミュニケーションを取っている感じですが、3画面ぐらい並んで話をしているときに話している相手とは違う人から返事があるとかなりの違和感があるんです。普通に会って話している会議の時はどの人から返事があってもそんなに違和感はありませんが、画面を見つめているときに違う画面から声が出る感覚というのも普通のコミュニケーションとはちょっと違うので戸惑うかもしれないけど、これも電話にはないコミュニケーションなのかなと思いました。

最後のパワーポイントはいま話したことの要約です。全国13カ所を結び、パソコンを使ってコミュニケーションの大切さを互いに確認しています。

あと、デジタル・アーカイブについては、簡単に言うとビデオの自動配信です。浦河町は、北海道の田舎なので電話回線が非常に細くて、今でも最大伝送速度はADSLの8メガですので、高速の回線が必要なサーバがおけない状態です。今、千歳の別会社にはサーバを置いて運営を頼んでいますが、光ファイバーが浦河町まで開通したらサーバを浦河町まで持ってきて、他の全国の作業所のこういった活動や写真、ビデオなどを一緒に配信して、互いが何をやっているかを伝えるようにしたい、ということをお話してきました。

サミットの感想ですが、発表しているときには僕はかなり頭の中が真っ白になり、読みあげるときも声が震えていていました。いちおう英語で話しましたが、隣の手話通訳の方が動きながらも訳せないところでぴたっと止まったりするのです。具体的には「昆布の販売をしています。」と言ったらぴたっと通訳者の人が止まってしまいました。やばっと思いつつも昆布は「ケルプ」だったことを思い出して、「ケルプ イズ フード」と言ったら、また動き始めたのでほっとしました。あとは点字の自動通訳などもあり、その通訳の方も自分が話すそばっくと動くので、普段の講演の時はみんなこうやってうんうんと聞いてくれますが、サミットの発表の時は、自分が話すのと同時にぶわーっと観客に向かって動く通訳の人たちの動きがすごく気になってあまり観客席が目に入りませんでした。でも一緒に参加していたべてのの家から行った荻野さんからは、「山根さんの発表のとき、みんなちゃんと聞いてくれていたよ。発表が終わったとき視聴覚障害者の方とかは、頭の上で手を振る拍手を何度もしてくれていたよ」と言われてうれしかったですね。そして「コミュニケーションを大切にしているというのは伝わったでしょうか？」と荻野さんに聞いたら「それはもう大丈夫だよ」と言われて、すごくほっとした覚えがあります。

発表が終わった直後にスイスの聾啞の方とダウン症の方、そして世界の精神障害のグループのコンサルタントの方などが来て激励してくださいました。その中でスイスの聾啞の方は筆談

をしながら、このシステムは自分の表情を伝えるだけでなく、画面の下の方にあるチャットの機能も使えば、精神障害、心の傷のある人達以外の人たちにももっと広くコミュニケーションのツールとして使ってもらったほうがいいんじゃないかと教えてくれました。自分では全然そういう可能性や使い方を考えておらず、ただ他の作業所と各作業所の中で抱え込んでいる問題を伝えたいと思っていたのですが、それ以外にもいろんな人が抱え込んでいる問題をテレビ会議やアーカイブを使って伝えることができるのではないかと、最後に発表が終わってから教えてもらえました。ああ、やっぱりいろんな人に会って話をするのはすばらしいことだなと思いました。この最後の写真は今回のサミットの写真の中でいちばん写りが気に入った写真（みんなで撮った記念写真）なので最後にこれをもってきました。以上です。



社会福祉法人 けやきの郷

理事長：須田 初枝

常務理事：阿部 叔子



今ご紹介に預かりました、須田でございます。先程ジョン・バーク先生のご紹介は、司会の方からお話いただきましたので、私からは詳しくは申しあげませんが、実は、河村さんが、一度自閉症のお子さんをお持ちのアメリカの親御さんを連れて、うちに見学にいらっしゃったことがございます。その時にけやきの郷の利用者の生活から、いろいろなことを感じてお帰りになったのだと思いますが、実は、その後、ジョン・バーク先生をお連れになりまして、自閉症の専門施設として実施している療育や働くことに感心していただいたのだと思いますが、そのときに、ジョン・バーク先生と一緒に、国連のサミットに出てみないかと言われました。私は驚くと同時に大変喜びまして、これは日本を代表して日本で生活している自閉症をわかってもらおうということで、私は「いきまーす」なんて言いました。後で後悔したわけですが大変なことを引き受けたと思いましたが、やるっきゃない。これが自閉症の母親たちのエネルギーでございまして、それで行くことになりました。

実はジョン・バーク先生とけやきの郷の理念がまったく一致しております。ジョン・バーク先生は実は、どんな重度の障害を持っていても社会に何を貢献していくかというようなことを基本に考えられておりました。そのために、現在、自閉症にどのような療育、教育、福祉、就労を支援していくかということを情報機器を使って、専門家や教員、ボランティア、本人、親などに情報公開をして、皆さんの相談にのっていらっしゃる先生でした。

けやきの郷の理念と申しますのは、私が35年間、自閉症親の会の役員をしております、いろんな団体と付き合っている中で、すごく私が感じたことがあります。それは何かと言いますと、やはり障害をもっている人間であるということ。人間として生きるためにどうしたらいいかということを考えたときに、私は豊かで幸せで、人間として責任をもって生きさせたいと考えました。特に自閉症の人たちは大きな体をしておりまして、力があって、食べ物もよく食べるし、ただし問題行動がたくさんある。そういう中で、成人施設をつくり、なにを基本にしたらいいかということを考えた時に、重い人もすべて働くということを基盤にしながら療育をどうやってしていくかということを基本に据えました。本当に働けるかと大変心配しましたが、やはり指導員の並々ならぬ努力によりまして、やまびこ製作所という福祉工場をつくり、グループホームに生活している利用者のことを発表したのです。

特に私が思うことは、人間として生きるためには、喜怒哀楽のある人生を送らせたい。その喜怒哀楽というものを自分の心の中で自閉症の人たちは育てることが難しい人たちなので、そういう環境をつくり、自閉症の子どもを発達をうながしていこうというのが私の考えでした。ただし、1人で自立していくことを考えましたが最重度の人を基盤においた場合に1人で自立することはなかなか難しいです。それで考え、私が発明した言葉ですが、「集団自立」。「自立が集団なんておかしいよ」って育成会のある方に言われまして、やり合ったことがあります。集団で1つの個になって、社会に貢献して自立していくという、これがいわゆる私たち、けやきの郷の理念なのです。けやきの郷ができてから19年になりますが、それを基盤にして今までやってきたおかげで、どんな重い人達でも、私のところでは働きながら、そして楽しみながら、余暇を十分に楽しみながら、そして悲しみながら、苦しみながら、そういう中で、自閉症の子供たちが非常に義務教育を終わった後の成人として義務を果たしているなど私はつくづく思っております。そういうところにお二方が感心してくださったのだと思いますが、世界情報社会サミットで映した映像をご覧に入れて皆さんに、この理念が生きていることをぜひ見ていただきたい。ただし、これは英語で説明をしております。

もうひとつ。この映像をつくるにはTBSのディレクターであります、山崎さんという皆さんもご存じの「渡る世間は鬼ばかり」の映像をつくり、ともさかりえさんの自閉症の映画をつくった方です。たまたまうちに来て、自閉症にとっても興味をもちまして、ずっとけやきの郷のお祭りにも出ていらして非常に理解のある方です。

その方に6時間、うちの、けやきの中の住人を撮っていただきまして、それを5分45秒に詰めたものです。ですから、いかに大変なことだったかをご想像下さい。…。阿部も以前、TBSのディレクターをしておりまして、映像を作り上げる途中で体調を崩すほどだったのですが、そんなようなことで映した映像です。実は私は英語ができません。それは戦前に生まれ、野球の「アウト」「ストライク」を「いい」「だめ」という時代に育ったものですから、英語がある程度、言っていることはわかりますが、自分で発言することは非常に難しいです。阿部は英語が分かるので、そういう意味でこの映像を映して、けやきの郷の理念と映像を説明したのは阿部です。私は広告をもって見せただけです。ここに掲げている理念は35年間の自閉症の運動の中から出てきた理念があることを、これを見ていただいて皆さんにわかっていただいたらありがたいと思います。

では映像を映して、ここには英語がわからない方はいらっしゃらないとは思いますが、一応、阿部が英語を日本語に訳して、5分45秒の画像を見て頂きたいと思います。

阿部／では、これからビデオを上映いたしますが、以下、場面場面のテロップに沿ってご説明いたします（ナレーション・テロップとも原文は英語――また、以下の（ ）の中は、映像の場面の説明）。

・（グループホーム「潮寮」より「やまびこ製作所」の利用者が、朝日を浴びて土手沿いに歩いている場面）

これは東京の西北35kmほどのところ（埼玉県川越市）にある自閉症の人たちの専門施設「け

やきの郷」です。自閉症の子どもをもつ親たちが発起人となって1985年に開所した施設で、現在、7つの施設をもっております。

・(利用者が土手を歩いている映像のつづき)

これは福祉工場「やまびこ製作所」の利用者たちが、グループホーム「潮寮」から出勤していく風景です。ハミングが聞こえていると思いますが、歌を歌っているのは私の息子・阿部太郎です。

・(タイムカードを押すシーン)

出勤してくると、はじめにタイムカードを押します。

・(仕事場の前で、ラジオ体操)

次にラジオ体操です。仕事前にラジオ体操をすることによって、筋肉をめざめさせるのが目的で、日本の現場企業の習慣ともいうべきものです。(ぴょんぴょんはねていたり、腕をパタパタさせている人も多く、自閉症の重い障害をもっている人たちだということが分かる)

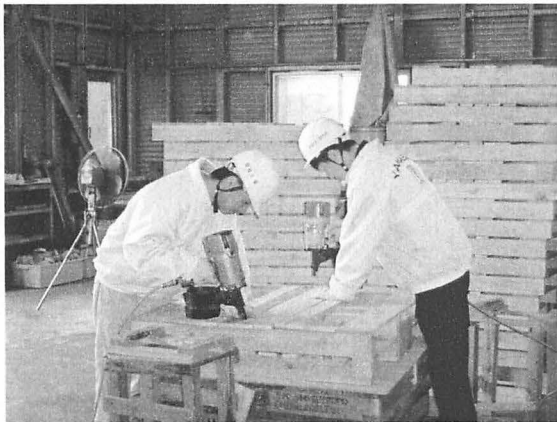
・(仕事場に全員が集まり、やまびこ製作所所長より、当日の作業の予定等を伝達)

これは朝礼です。利用者の一人が「今日も頑張ろう」と言っております。

・(朝礼が終わり、ヘルメットをかぶり、軍手をはめて持ち場につき、パレットー木製荷台一の製作に取りかかる)

このようにして、仕事が始まるわけですが、やまびこ製作所は、このようなパレットー木製荷台一を製作しています。

・(2人組になって、パレットを製作している場面)



2人組のうち、手前が、今お話のありました須田理事長の息子さんの宏さんです。7気圧のネイラー(釘打ち機)を使ってパレット製作するのは、技術的にも非常に難しい作業ですが、開所以来15年の間にケガをした人は2人だけ。それも、軽いけがです。

仕事は非常に手早く正確なので、外部からの評価も高く、多くの企業と受注契約を結んでいます。

・(ハンマーで釘をうつ場面・当て木をする場面・釘を取り替えている場面)

もし、このネイラーがうまく働かなかったり、打った釘がはずれてしまったような時は、ハンマーを使い打ち直します。また、材木と材木の間に当て木をすることによって、間隔を正確にとることができます。

大部分の方、それも自閉症をご存じの方ほど、自閉症の人たちはチームを組んで、お互いに連携を取り合っの事は難しいだろうと思われていると思いますが、「やまびこ製作所」では

それができているのです。呼吸を合わせてやっています。それは、「心の構造化」つまり、スタッフが、利用者の心に寄り添いながら、作業の手順を分かりやすく提示し、繰り返し指導することによってできるようになっているからです。

ごらんのように、釘も自分たちで非常に安全に交換しています。また、早く仕事をする人が、仕事の遅い人たちに合わせています。

また、このペアの組み合わせは毎日代わりますが、それによって、混乱することはまったくありません。これも、自閉症の人たちにとっては、おどろくべきことかもしれません。

・(マーキングー出来上がったパレットに、社名を刷り込む)

これはできあがったパレットに、会社名を刷り込む「マーキング」という仕事です。これも2人組でやります。

・(カッターに長尺の材木を運ぶ)

材木をカッターに運んでいるのは、障害の程度でいうなら、最重度といわれている人たちです。2人とも言葉はありません。でもこの2人がペアとなり、呼吸を合わせ、お互いの行動を見ながら、4メートルほどもある材木をカッターに運びます。これには、WSISで共同発表したバーク博士も河村さんも特に感心していらっしゃいました。

障害の重い人たちがここまでできたのも、スタッフの長い間の熱心な支えと愛情があったからこそです。

・(グループホームでの食事場面・食器洗い・洗濯・テレビ鑑賞・日記をつける場面)

利用者がここまでできたのも、「心の構造化」・スタッフの支援・愛情とともに、グループホームでともに暮らすという、「働く場」「生活の場」が一緒であるということが理由の一つです。食事のあと、当番がきまっていますが、みんなで皿を洗ったり、洗濯機を回しております。また、テレビをみたりCDを聞いたり、フリータイムを楽しんでいます。(日記をつけている利用者に)この人は毎日非常に正確に日記を書いています。パレットを何台つくったか、何を食べたか、それも、たとえばサラダでしたら、レタス、キュウリ、ピーマン、トマト等、その内容まで実に細かく書いています。(彼の制作した刺繍をアップ)これは、彼が作った見事な刺繍です。

・(利用者へのインタビュー)

Q「おうちとこと、どっちがいいですか」

A「こっちがいい」

・(初雁の家のベーカリー班の映像)

グループホームの利用者は、この最初に設立した知的障害者更生施設「初雁の家」を通過した人たちです。「初雁の家」も、働くことを療育の中心とし、生活をともにすることによって、自立を促す支援を行っています。この人たちは、「初雁の家」のベーカリー班です。これから、自分たちの作ったパンを、外に売りに行くところです。

・(ヘリコプター会社で塗装をする人たち)

この人たちは、けやきの郷の通所授産施設「ワークセンターけやき」の利用者で、ジョブ・コーチがついて、近くのヘリコプターの会社で塗装の仕事をしています。ジョブ・コーチは、毎日一度ずつ回って、仕事ぶりをチェックしたり、企業主と連携を図っています。

・(自閉症・発達障害支援センターの場面)

これは、地域の自閉症の人たちを支援する支援センターです。

支援センターは、自閉症の人たちの支援にあたる人たち(家族、寮育者、教員、福祉職員、福祉行政等)のための研修のほか、自閉症の人たち、家族、支援者などへの相談・支援をインターネットなどを使って支援しています。

・(やまびこ製作所の給料日の場面)

やまびこ製作所の給料日です。一人ひとりに給料を手渡します。以下、その会話です。

所長「今月もよく働いてもらいました。おかげさんで、たくさんのパレットができました。ありがとうございます」

所長「今岡くん。ありがとうね」(といて、給料袋を手渡す)

今岡「ありがとうございました」

所長「網代俊哉くん」

網代「ハイ」

所長「網代くん。給料もらったら、温泉に行くの？」

網代「温泉に行く、楽しいね、良かったね」

所長「阿部太郎くん」(最重度ですが、やっぱり給料をもらおうと嬉しそうです)

所長「ご苦労さん」

阿部「ハイ」

この給料でグループホームの生活費をまかなっています。

・(やまびこ製作所の人たちがグループホームに帰る場面、一人の利用者が手をつないでいる)
このように、彼らは、手をつないで助け合っているのです。

・(「初雁の家」の利用者たちが土手を歩いてくる。お互いに手をつないでいる)
この「初雁の家」の人たちは、自立に向かって歩いていく新しい人たちです。

・(新しい人たちが、けやきのきの下で、手を振っている)

この新しい人たちも、「やまびこ製作所」の人たちのように助け合い、手をつなぎあって、自立していこうとしているのです。"Helping each other, hand in hand"

これが、皆様方へ送る「けやきの郷」からのメッセージです。

以上、説明を終わります。



須田/いかがでしたか？自閉症はダメだと言われていますが、やっぱり専門性を持った施設でしっかりと受け止める。これがすごく大事なことですし、我々が国連で世界に向かってこういうことを発表できたのは、日本を代表してやったのだなとつくづく思います。ますます河村さんには感謝しなくてはなりません。

これを、自閉症協会で施設をやっている人がたくさんいますが、そういう方に言いますと「よかったわね」といいながら、腹の中では「私たちだって負けないわ！」と思った人たちが多々あったのではないのでしょうか。このような負けぬ気持ちがあつてこそ、より良い施設になるのだと思います。そういうことを世界に伝えて、世界の中にも、このような施設が多くたくさんできることを願っています。

ジョン・パーク先生も、私たちは初めにそちらにおうかがいして、先生の所の施設も見せていただきましたが、みなさんが大変一生懸命です。指導してらっしゃる方が。学校も見せていただきました。うちは施設ですが、学校を中心にして小さい時からやっていらっしゃって、本当に素晴らしいなと思いました。先生と一緒に共有してやっていきたいと思います。最後はお別れしました。

このサミットに出させていただいたのですが、サミットの感想を最後に述べて締めくくります。まだ7分ぐらいありますので。実は、私は英語を話せませんけれど、話さないだけに、その壇上に立っている方たちの熱意というものを非常に肌で感じました。それぞれの障害を代表して来た方たちだと思いますけど、皆さん前向きです、障害を持っていますが。人間として生きていくためには、やはり前向きに生活し、取り組んでいくことの大変さ、大事さを私は非常に感じました。それと同時にいろんな障害があつて、お互いにその障害を理解しあえることもできたと考えています。そのネットワークは、自閉症ばかりでなくいろんな障害とともに考え、人間として、地球上に住んで、幸せに責任をもって生きていくためにお互いに協調していきたいということを、私は心のなかに非常に感じて帰ってまいりました。そしてけやきの郷も皆さんに見て頂きましたが、まだまだやらなきゃならないことがたくさんあります。

これは、我々の単なる第一歩でして、これからもっともっと、これを機に、しっかりした情報を皆さんに提供していきたいと思っています。けやきの郷としては日本の風土にあった、文化にあった、国民性にあった、日本の制度にのった中で、自閉症の人たちが人間として生きるためのシステムづくりを、これから全員で努力してやっていきたいというふうに考えております。これが私の感想です。阿部さんは英語ができるので、もっと詳しいことを感じてお帰りになったと思います。一言どうぞ。

阿部/私も、須田さんがいま申し上げたようなことをひしひしと感じました。プレゼンテーションが終わったとき、大きな拍手をいただきました。また、私たちのところに何人もの方々がかけよってきて「感激しました」とか、「是非、チュニスでお会いしましょう」とも言われました。情報弱者の中でも、発達に障害のある自閉症の人たちは、さらに組みの難しい条件をもっている人たちだと思います。その中で、わたしたちの発信がどう受けとめられるかという一抹の不安がなかったわけではありませんでしたので、「人間として責任をもって生きること、生きるためのシステム作り・環境整備を」といったわたしたちの思いが熱く受け止めてい

ただけた、この情報が世界に届けられたということは非常に嬉しく、また、これからの責任を重く感じた次第です。

でも、それは、当然といえば当然だったのです。というのは、WSIS開催までの事前のインターネットを通じて、私は、河村さんをはじめとするGlobal Forumの方々の熱いやりとりを目の当たりにしていたからです。

実は、私も情報弱者の一人であります。というのも、去年の11月までは、メールとか、インターネットなどは、難しくて怖くて触れない一人だったからです。でも、なんとなく予感があったのでしょうか、自宅にもノートパソコンを10月の末に買い込みました。河村さんから「国連に行きましょう」というお誘いがあったのが10月26日。これはきっと忙しくなるぞ、つまり、このビデオの台本づくりとか連絡とかメールのやりとりとかやることになるだろうな。そういう予感が、多分あったのですね。それで恐る恐るやり始めて、河村さんに初めてのメールを送りました。と、次の日、私のメールに入っていたのが、キキさんという方からのメールです。このキキさんは何？と私、全然わからなくて。そしたらそのキキさんは、さっき野村さんもお話申し上げた、国際障害者同盟の会長さんで、今度のサミットで、アナン事務総長の次に基調報告をなさったという凄い方です。その方からのメールでしたが、そういうメールがじゃんじゃん、一日に何十通も入ってきたのです。そのメールの洪水の中で、私には、河村さんが、障害者の権利・人権を情報社会のギャップを埋めるために文言に折り込ませようと、ものすごい努力をなさっているのということが分かってきました。

特に、パラグラフ22。これはDINFを開けますと出てきますが、ここに障害者への配慮や人権を盛り込んだのですが、盛り込むためのすごいディスカッションを、メールを通じて国際的にやっている。昨日はストックホルム、デンマーク、ニューヨークから、今日はインドから、などなど。そしてやっと、タイのモンティアンさんから修正案を出して受理されたということ。河村さんからの配信で見たとき涙がでる思いでした。その時のモンティアンさんのメールが、スイスのチューリッヒから「I'm heading back.」そして「何者にも負けないぞ」なんですね。その方は視覚障害の方ですが、そういう意気込みで、世界中のあらゆる障害の方が、このメールを通じて、河村さんに全部集約して、障害者の権利などをこの国連の中に認めさせようと努力をなさっている。そして私たちもその中の一員に入れて頂いたと言っていいのかわかりませんが、少なくとも、その1つの役目を少しは担わせてもいただいたという感激で私は胸が熱くなりました。

また、キキさんが基調講演をなさることが河村さんの呼びかけで決まると、世界中からキキさんに対してCongratulationのメッセージがパーっと入ったのです。すごい連帯感です。私は寝不足も忘れて、そのメールを毎日毎日一生懸命見ておりました。こういう努力があって、そして連帯があるからこそ、自閉症というなかなかわかりにくい、理解されない障害のわが子たちも生かされているのだなということを、非常に強く感じました。

ジュネーブでは、そういう方たちがどういう顔をしているのだろうというのが私の大きな興味だったのですが、さすが、すごい方たちでしたね。どっしりとして、自信にあふれ、しかも配慮が行き届いたデリケートな方たちばかりでした。世界の素晴らしい人たちに出会えたことは、わたしたちにとって、これからのすごい財産になると思います。

また、アメリカのKATCのバーク先生からもメールをいただきまして、これからけやきの郷と一緒に共同研究をしていきたいというお申し込みを受けました。私たちはこれからプロジェクトチームをつくり、共同研究をし、世界中にICTを使い、さらに発信していきたいと思っています。

私の感じたところはそんなところです。どうもありがとうございました。

国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所障害福祉研究部長

河村 宏



こんばんは。いま紹介いただきました河村です。私はこれから30分の時間をいただきまして、今回のサミットが何であったのか、そして、これから私どもの共通の関心だと思いますが、すべてのいろんな種類の障害をもつ人にとって、それから世界中のありとあらゆる場所にいる障害者、あるいはその家族、そしてともに歩んでいる人々にとって、このサミットが今後どんなことが期待できそうなのか。何をやればいいんだろうか、というようなことについてお話を申し上げたいと思います。

まず、このサミットがどんなものだったのかということが概略、ほとんどこれはウェブからお借りしていますが、そのままコピーをして使わせて頂いています。2003年の12月10日から3日間、スイスのジュネーブで世界情報社会サミットの本番がありました。3日間です。ところが、この3日間を準備するために、2年間の準備期間がありました。なぜそんな長い準備をしたのか、というところが1つ問題です。実はこのサミットが狙っているのは、まずは、1つはデジタル・デバイドと呼ばれる情報格差が、いわゆる情報社会、情報通信技術が発展することによって格差が開いていく、それをどうしたらいいのかという社会的な問題を議論する、というのが中心のテーマです。これはよく誤解されるのですが、情報社会サミットだから、技術的な問題のサミットではないか。ましてや日本では担当の役所は総務省でした。それも、その中の通信に関わるところが中心だったと思います。国際的な国連の中の分担では、ITU（通信連合）でした。つまり、どうも技術屋的な色彩が強い、そういう準備プロセスでした。ところが、よく考えてみると、社会的な問題を取り上げるサミットです。ITUはそういう社会的な問題にこれまで取り組んできた実績がないです。率直に言って。電波の割り振りとか、通信規格とか、そういう技術的なものを国連ができる遥か以前からずっと世界中で調整をする、そういう役割をしてきていますので非常に地味な、縁の下の力持ちのインフラのところを国際標準したり、調整をしたりしてきた団体だったのです。

ところが、デジタル・デバイドというのは南北格差の問題がまずあります。これはもう非常に激しい国際的な対立をはらむ問題であるわけです。そして社会的な格差も含むわけです。この社会的格差の中には当然、アクセシビリティをめぐる障害者と非障害者という問題が1つあります。もっと細かく見ると、いわゆる感覚機能、見える、聞こえる、あるいはモビリティ。だいたい手で操作しますから、手で操作できる、できない。それから見たものが理解できるか

どうか。認知、あるいは知的な、それぞれの場面での障害ということがすべてそこに当然盛り込まれて格差というものが考えられなければいけない。非常に複雑な問題であるわけです。さらには、文化的な問題もあります。言語です。特に今のインターネット、あるいはいわゆる情報通信技術が媒介としているメディア。言語的に見ますと、英語が圧倒的に多い。では、例えば日本のアイヌの言語文化。今日もいらしていますが、書記文字を使わないろう者の方の手話の文化。あるいはオーストラリアの先住民族。先進国にもいます。アメリカの先住民族。そういった人たちが使っている言語のコンテンツはどうするのかというような問題もあります。ユネスコなどは、そういう部分を強調しています。世界中で今、言語文化が死に絶えようとしているものがたくさんあります。これをどうやって保存、発展するのか。そういう観点からこのサミットを見ていきたいというのがユネスコの大きな柱でした。そういうふうに、およそ電波の割り振りや通信規格の議論からかけ離れた、ありとあらゆる社会の問題、生身の人間が直面している問題を、この情報技術が発展する中で、さらに悪く格差が拡大しないように、どのように格差を縮め、全ての人がこの技術を楽しめると言いますか、人権宣言で言われているように、文化的、科学的な成果を全ての人には享受する権利があるのです。その立場から見て情報通信技術が社会にとっての分裂を深めるような要素にならないためにはどうしたらいいのか。あるいは、もっと積極的に、ソーシャルインクルージョン、社会的な統合を進めていくにはどのようにしたらいいのか。という問題意識が、実はメインテーマであったという事です。その事が、正直言って、日本の報道を見ましてもほとんど触れられていないと言うふうに思います。したがって、本当の意味で関心を持つべき人たちの声が本当に届いているのかというのが準備プロセスでも常に問題になっていました。

ところが、サミットで1つ今までにない前進もありました。それは、何人かの方は覚えていらっしゃると思いますが、リオの環境サミットというのが、だいぶ昔にありました。サミットというと、リオデジャネイロであった環境サミットというのがマスコミにも大きく取り上げられたことがはしりではないかと思います。あの時は世界中の環境について問題意識を持つ市民団体、NGOが、国の政府代表が集まるサミットを周りで取り囲む形で、会場の外で思い思いに集会を開きアピールをし、宣言を採択するという、内と外に分かれてサミットの取り組みが行われました。当然、警備もものすごく厳しくて、いつデモ隊がなだれ込むかという緊張感の中で行なわれてきたのが、これまでのサミットだったと思います。ところが、情報社会の中心的存在になっている技術、インターネットの技術ですが、これは実は政府の決定で広がってきたものではありません。全くその逆です。政府は国際規格をISO（世界標準化機構）を中心に通信規格を決めて、「これでいこう。」と決めたものがありました。ところがそれとは別のもっと簡単に、「こうやればうまくつながるよ。」という人たちがはじめ、それがなんとなく世界中をつないでいった。最初はもちろん大学の研究者やコンピューター技術の研究者、それから世界中で物理データを同時に使いたい物理の研究者、そういった人たちが作った技術、それが、いわゆる「defacto」とよく言いますが、既成事実として世界中で標準として使われてきた、というのが「インターネット・プロトコル」と呼ばれるものです。インターネットの通信規格です。もともと政府が主役ではないところに今のインターネット社会は築かれました。情報社会をどうするかという議論の時に、インターネットを除いては話にならない。どうしてもインターネットのことを取り上げなければいけない。しかし、それがかなり中心になる。だとすると、これまでインターネットを育て、使い、発信し、受信してきた世界中の数億の人たちを差し置いて、政府だけで、しかも外交官中心の、私は悪口を言うつもりはありませんが、外交官が詳しいのは手順です。交渉もうまい。ところが中身は、そんなにすべての問題につい

て知っているはずがない。中身については、どうしても専門的な見地、あるいは、実際の社会でのみんなのコンセンサスというものが必要になります。もし外交官と一握りの専門家だけでこのインターネットのことを議論して決めても結局それは誰も、見向きもしない。ただ、上のほうで政府が何か決めた、それを執行しようとしても、なかなかその通りには世の中動かない。そういうものになってしまうという意味で、いわゆる市民社会が厳然たる實力をもっている世界がインターネットの世界です。このことが反映している、というのが1つ有ります。もうひとつは、世の中全体の動きが政府だけでは決められないよと。やはり、Stake holder と言う言葉よく言いますが、関係する人みんなが参加してコンセンサスを作っていないとうまくいかないという一般的な流れというものが、実は国連のサミットの歴史で初めて、市民社会の代表者にもこれを開く、そして市民と一緒に参加するサミットを初めてやりましょうという風に、国連が決定していたのです。どのように実質的に作るかはまだまだ問題がありますが、原則として、このサミットは政府だけでやるのではなく、政府と市民社会と産業界、あらゆるマルチ・ステイク・ホルダーという言い方をしますが、あらゆる関係者がみんなできつくりあげるサミットであるという立場でもともと構想された会議です。これは一歩大きく前進したことだと思います。

この中で、窓口は開かれているということになっていて、開かれてはいるが、ウェブの上でこっそり開かれていただけです。なかなか中身は分からない。確かにドキュメントはウェブで全部公開しています。あらゆる地域でやった会議のドキュメントもみんな公開しています。これほど会議の資料をオープンにしながらやったサミットも珍しいのではないかと思います。それほど公開されていますが、これはある意味で情報の渦でありまして、そのなかから何を拾ってどう読むか、ということはなかなか分かりません。何でもあるけれども、その中から、自分がほしい情報を取り出すことが極めて難しい。そういう状況のなかで準備会議が行われました。

準備会議は大きく、3回ありました。1回2週間です。それを3回やる。あろうことかそれだけでは足りないということで、急にその中間で1週間の会議を2回いれました。それでも足りなくて、最後の12月10日の直前にも、また2日間やっています。なぜそんなにやるのか。まともなからです。やはりそれだけもめる要素があったということです。

主たる要素は、インターネットの管理の仕方です。それを国際的な管理にするのか、今のようにはアメリカが中心で管理をするというやり方でいくのか。もうひとつは、南北問題です。このままでいったら、ますます南北の格差が開く、これは誰もが認めることです。それは世界の緊張をもたらし、さらには、社会的悲慘を南だけでなく、緊張の結果として北の国にももたらす。みんな分かっています。ではどのように格差を解消するのか、それがなかなか合意に至らなかったということです。実は、その裏に隠れて、全く報道されませんでした。先ほど裏話としてご紹介があったように、このサミットの宣言を巡るやりとりがありました。

いくつかの流れがありますが、その中の1つに私が関係してきた障害に関する記述をサミットの基本宣言と行動計画の中でどのようにするのか、ということでした。なかなかこれは簡単ではない話です。どうしてかと言いますと、いわゆる市民団体というのはそれぞれの課題を担って、サミットの準備課程に参加しています。そういういろんな課題の中の1つとして、障害の問題が往々にして見られます。例えば、女性差別の問題。これはこれで重要な問題ですが、女性差別の問題とかインターネットは特に青年についてもっと配慮しながら進めるべきだというグループもありました。子どもが大事だというグループもありました。たまたま高齢者が大事だ

というグループは来ていませんでしたが、結構そういう性別、エイジグループという感じで来ていました。それから先住民族の代表も来ていました。アフリカの地域の問題、あるいはラテン・アメリカ、アジアの地域の問題で来ているグループもありました。それぞれがそれぞれの切実な問題を抱えてくるので、どうしても、このことを宣言の中に盛り込んでもらいたいというものがみんなそれぞれありました。私どもも障害の問題を言うわけです。すると、何かこれは大事だというときに、それはすごく障害にかかわる問題だから必ず障害のことを考慮してもらわないと困ると言う、「そうだ！」と他のグループも婦人も、子どももとなる。確かにそうです。何か発言して出す度に、なぜ障害者だけ特別に書くのかというふうに、すぐまた後から議論が出てきて、じゃあこれも入れましょう、あれも入れましょうと、誰も反対できないので、どんどんつくわけです。で、全部ついた後で最後のテキストを見ると、なんでこんな長いのか？ これは外交官が言うのです。外交官は長いテキストはダメだと言うわけです。個々の要求を担ってくる人たちは、やはりここで一言言わざるを得ないわけです。当然言いたいわけです。私も障害というだけじゃなくて、もっと細かく言いたいのです。ところがよく考えてみると、もし500ページの宣言ができて誰が読みますか。確かにそうです。全部書いてはある。逆に誰も読まなくなる。なにが焦点だかわからない。そうすると結果として、提案したものが入ったり、削られたり、攻防戦みたいなことをやっていたのですが、その度に、理解してもらうことが大事だと考えて、プリントを作って、会場のピラ撒きをするというようなことをやっておりました。印刷設備もありましたし、インターネットも完備していましたので、先程、阿部さんから紹介もありましたように、原稿をつくって世界中の仲間にメーリングリストで流して意見を求めるわけです。するとこれはいい、だめだと色々来ます。それを今日の何時までに出さないと間に合わないとお伝えして、その意見をその時刻で締め切って、私のできる範囲で取り入れて、それをピラにして、外交官に配るわけです。配っていると、だんだん顔なじみの人も出てきて、ちょっとこれはどういう意味だと説明を求められたり、休み時間になると暇な人も結構いまして、おもしろがって話しに来る。いろんな接点がそこでできました。それで一番大事なことは、結果よりも問題を理解してもらう。その重要な条約とか宣言の基礎・決定に関わる人たち1人1人がどういう期待がこれに寄せられているのかを理解してもらうことが何よりも大事ではないかということで、文言にこだわるよりは、やはりなぜそういうふう to これが必要だというふう to 思うのかという理由をできるだけ具体的に書いて、私の記憶では4回ぐらいピラを出しました。結構みんなよく読んでくれてました。最後のほうでは、一番はっきり意見を表明したのは、メキシコの代表でしたが、配ったピラを手にとって、その中の書いてある通り、引用して、たまたま私はそのとき議長に配るのを忘れていまして、壇の上にはいたから。下にいる人には配りましたが、議長だけそのピラはどこにあるのかと探したんで、すぐ走っていってお届けしました。やはり、ちゃんと説明すればわかってくれるものだということがよくわかりましたし、結局、そういうプロセスを経るために、1回2週間もある長丁場なものも逆に、変な風に納得できた感じでした。

そういうプロセスを経て12月10日から3日間、これは第1ラウンドのサミットです。今日の出だしの話にもありましたが、第2ラウンドというのが一緒にセットされている極めて珍しい2ラウンド制のものです。第2ラウンドはアフリカのチュニジアで開かれる予定です。これには人権グループからの激しい反対があります。チュニジアは人権侵害をしている国だから、そんなところで開いてはならないというグループが、Eメールリストで非常に活発に声を挙げています。従いまして、みんなが賛成してチュニジアでやろうと言っているわけではないのですが、一応、チュニジアでやる予定になっています。私が思うには、多少人権侵害があったと

しても、このように市民もきちんと市民グループも公開で受け入れなければいけないということが、最初から規定されているサミットですので逆にそこで積極的にいろんな要求、人権問題も含めて参加し、そこで現地で合流をするという取り組み方をしてもいいのではないかと私は思っています。

この3日間の中で、いくつかの障害に関わる宣言文だけではない、もう少し、みんなが参加して「うん、これか」ときちんとわかって帰っていく、そういうことをやったほうがいいということで、3つ企画しました。この企画をした立場ですが、実は、最初に私がここに参加したときは日本障害者リハビリテーション協会に勤めており、国家公務員ではありませんでした。従って、もろにNGOという立場で動けたのでNGOのグループミーティングに出て、そこでテーマ別でグループをつくり、どんなテーマでもいいから、何人か集まればグループがつくれるということが先程申し上げた第2回目の二週間の会議の中でありました。そこで私は誰か「障害」と言ったらそこに行こうと思っていましたが、とうとう最後まで「障害」についてのグループを提案する人がいなかったの、おそろおそろ手を挙げて、障害に関するグループをつくりたいと言ったら、会場から「賛成」という声があがりました。たった3人で旗揚げしたのですが、障害についてのグループをつくることができました。一回つくとグループ代表が集まって、その後、市民社会グループとしての大きな市民社会グループの会議の中で政府グループとの対話をどのように進めるかというサイクルがありまして、全体の様子がわかるという効果がありました。三人しかいない中で私が言い出しっぺだから責任者になれと言われて責任者をやりまして、その後、ずっといまだにその責任者を引き継いでおります。私は、国家公務員ではありますが、サミットに行くときには、政府代表ではなく、研究職の公務員ということで、「専門の研究に行く」という立場です。世界の障害者のリハビリテーションをいかに前進させるのかが私の研究テーマですので、そのために役に立つ研究の場と位置づけで出させていただいています。

従って、NGOを含む研究・実践グループの、英語では、focal point といいますが、世話人みたいなものを今務めさせて頂いています。そういう形でサミットにかかわり、何か企画の提案をしと言われて、3つの提案をしました。

1つは、この開会式に市民社会グループ代表が、1人発言の挨拶をします。いろんな候補があがったのですが、その中で、どう考えても私にはキキ・ノードストロームさん、国際障害同盟、IDA (International Disability Alliance) の会長さんですが、文字通り、世界の国際障害者団体の合議をする場所で、国連に障害者の声をひとつにして意見を言う、そういう役割をする団体ですが、その代表者であり、5人のお子さんのお母さんであるという意味で、女性の立場も代表できる。そして、非常に足繁く発展途上国に行かれていまして、世界盲人連合の会長さんなので、途上国の視覚障害者の支援というものをずっと深く関わっておられるという意味で途上国の実情もご存じである。どうみても他の候補者よりもキキさんの方が優れているということで、推薦したわけです。幸い、最終的に、私の推薦とは無関係に、公平に審査をして、ITUの事務局長からキキさんにぜひ挨拶をしてもらいたい、本人の承諾を得てほしいという連絡がきまして、それで、本人に快く承諾をしていただいた、という経過があります。やはり、全体のプロセスを通じて、ほとんど障害者自身が参加をしてこなかった、そういう欠点があります。その欠点を補うために、開会式の挨拶に点字の原稿をもって挨拶をなさる方が、登壇することは非常に意義のあることだったと思います。それは、象徴的にすべての、いろんなタイ

ブの障害を持つ世界中の人たちが、このサミットに期待を持っているということをいろんな形で表せる、集約したものだと思います。非常によかったと思います。2つ目は、グローバル・フォーラムということで、あ、キキさんの写真をちょっと。会場で撮りました。小さいですが、スクリーンに写っているのがキキさん。小柄な感じの金髪で色白な方で、5人も育てられたとは信じられないですが、元気いっぱいの方です。

もう1つの企画というのは、グローバル・フォーラムという、これはできるだけ障害者自身の方達が参加をして、フォーラムをもってほしい、という意味で提案したものです。グローバル・フォーラムというものをやりました。情報社会における障害者の問題を考えるグローバル・フォーラム、というのが正式な名前です。詳しい紹介は、日本障害者リハビリテーション協会のウェブサイトの方にあります。ここでは、実は非常に重要な宣言をいたしました。グローバル・フォーラムで独自の宣言をして、これからの方向性について明らかにしたわけです。宣言もすでに日本語に訳されてリハビリテーション協会のウェブにありますので、これもご覧いただけたらと思います。かいつまんで要点を申し上げますと、情報コミュニケーション、情報そのものとコミュニケーションをすること、それから情報とコミュニケーションに関わる機器、システム、それらへのアクセスというのは、基本的人権である、ということです。それは、チャンスがあったら使ってもいい、あるいは贅沢なものということではなく、今や基本的人権、なくてはならないものであるということを、あらためて宣言をしています。これがなかなかですね、本音ではそう思っていない人が多いです。例えばインターネット。私どもは盲ろうの方とコミュニケーションを図るには、多分インターネット以外にはないのではないかと私は思っています。隣にいれば別だけれど。手紙を書いても難しい、ダイレクトに会話をしようとしても触覚で対話できるのは、ずいぶん先の話だろうと思う。でも、もしその盲ろうの方が、1つは今の技術だと点字を知っていればいちばんチャンスですが、仮に点字まで知らなくても、何らかの形で触覚で選べる、そういういくつかのキーワードをつないで送り出すと、相手側に文章、あるいは絵で送られる。それを見て、今度はそれに返事をする、触覚で触って分かる形で返事がくる。それは可能だと思います。いまの技術でも可能だと。つまり、それほど大きな大発見をしなくてもできる、というところがミソです。インターネットが何故そんなに可能性があるかというと、ありとあらゆるものが自由に付け加えられる、開かれた規格になっているのが重要な点だと重います。

それにいちばん近くて遠いのが、テレビとDVDです。これは、見たところは似たものですが、インターネット動画もそうですが、がんじがらめに規格が決まっていて、その上、更に何重にも鍵をかける規格まで決まっている。その規格の中には、なんと地域によって、その地域を超えて持って行ったら使えないという鍵まで規格で決まっている。先程マルチ・ステイク・ホルダーの参加という言い方をしましたが、利害に関係のある人が決めるのと正反対のプロセスで決まっています。いつの間にか、蓋を開けてみたら、業界の申し合わせで、デジタル・ビデオは1回しかコピーできない。新聞報道にありましたが、「そんなの聞いたことない、業界だけが決めた」と私は言いたい。1回だけしかコピーできないなんて、誰がどうやって決めるのかということです。それから日本で使っているDVDはアメリカでは使えない。逆もそうです。アメリカの装置を日本へ持って来なければ、アメリカから持ってきたDVDはかけられない。つまり、そんなような世界を勝手に分割する。これも消費者の意見をきかずに勝手に決めているわけです。つまり、インターネットの場合はその逆です。ウェブは皆さん「表示」を開くと、裏まで見えますよね。ソースコードまで見えます。完全に公開しています。ですから、

鍵を掛けるのと全く逆です。この完全に公開するからこそ、みんながアクセスできるチャンスがある。そういう意味でこの基本的人権であるという情報コミュニケーションおよびICTへのアクセスということを具体化していかなければいけない。それが幾つか、そのための提言というのが他の部分にもこの宣言の中で書いてあります。つまり基本的人権であるということは、それがなければ普通に生活するのに支障がある。参加するのに支障がある。同時にそれを実現するための技術的手段は既にある。あるいはちょっと工夫すればできる、手の届くところにある、という両方を含めて宣言しているのです。

そろそろまとめに入らないといけないわけですが、このグローバル・フォーラムで先程ご発表いただいた皆さんからの、結構ユーモアあふれる部分もありましたし、とても感動する部分もありました。それから少し他の発表者の方たちに触れますと、全盲の方、手話を使われる方に、今度新しくドイツでテレビ電話にさらに字幕をつけたようなテレシップというものを開発したもの、その発表の時に出演していただきましたし、知的障害者が自分で声と絵でメールをする、そういうシステムの紹介もイギリスからありました。スウェーデンからは読み書き障害、ディスレクシアの方がご本人が登壇されてスウェーデンで開発しているシステムの紹介。これはDAISYのシステムを発展させたものというふうに見られますが、それも紹介されました。日本から、先程ご発表いただいた、けやきの郷とべてるの家から行っていただいて非常によかったなと思ったのは、精神障害の分野での取り組みというのは、世界的に見ても本当に遅れていると思うんです。それについて、大きな励ましになる、とてもいい事例の発表をしていただいたと思います。自閉症については、重い障害であることは確かですが、重い障害であるがゆえにとことん研究し、熱意を込めて、これまで実践を重ねてこられた成果、そしてそのノウハウをインターネットを通じてアウトリーチをしようとしている。そういう形でみんなのノウハウを今の情報コミュニケーション手段を使ってもっと世界に広がっていかなければいけない。それはどうやったらできるのか、ということについての糸口を示して頂けたという意味で、大変意義の深い発表だったと思います。

私自身は、その場を借りまして、災害のとき、あるいは今、鳥のウイルスが急に問題になっていますが、そういうウイルス、あるいはHIVなどで情報を得る間もなく犠牲になっている障害者が発展途上国にもものすごく多いというレポートを聞いております。イランの地震のときも、ほとんど障害という観点では報告がありませんでしたが、最も弱い立場にあった人たちが障害者ではなかったのかと思います。つまり、この情報とコミュニケーションというのは基本的人権であると同時に、ある意味で命綱である。この命綱をどのようにいち早く、障害をもつからこそ活用してこの社会的な格差をなくし、安全、或いは安心して暮らしていけるようになるのか、社会参加できるようにするかというのが特に強調されなければいけない、これからのサミットのテーマではないかと思うわけです。

幸い、サミットの際には9000枚ほどCD-ROMをスイスの人たちが中心になってつくってくれまして、今日お手元に日本障害者リハビリテーション協会から配られたCD-ROMが入っていますが、それと同じフォーマットのDAISYというフォーマットで、中国語、アラビア語、英語、スペイン語、ロシア語、フランス語の6カ国語でつくりました。ドキュメントを6カ国語で作り、そして9000枚配布しました。恐らく、サミットの参加者の何人かは希望していますが、それを持って帰って見て、こうすれば様々な障害がある人が読める文献、理解できる文献が可能だということを、現実のそれがつくられて配られていることを体験しても

らえるのではないかと思います。そして今度の2005年、もう来年の11月に、チュニジアで行われるサミットでは、このグローバル・フォーラムをもっと発展させて、もっと長い期間現地で交流できるような場にしてそれぞれのテーマ別、地域別に交流を深めながら、その後の取り組みを展望していく機会を設けると同時に、もう一つは行動計画の中に、具体的にもっと障害について、一方でユニバーサルデザインが大事だと思います。もう一方で1人1人の障害とユニバーサルにデザインされたものをつなぐ支援技術というものがが必要です。この両方をもっと発展させることを国際的な共通理解にして実践を深める取り組みができればと思っています。

以上で時間を超過して申し訳ありませんが、私のサミットについてのご報告とさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

野村／ありがとうございました。これから、皆さんの質疑応答を受け、30分程度ですが討論に入りたいと思います。

野村／最初にフロアからの質問を受けたいと思います。挙手をしていただき、お話しいただく前にお名前と所属をおっしゃってください。



会場／職業能力開発総合大学校福祉工学科のアオキと申します。座ったままで失礼します。山根さんに質問です。私も精神保健福祉の分野で活動する機会があり、大変興味深く聞きました。2点ほど質問があります。テレビ会議は、どのくらいの頻度で行っているのか。第2点目は、全国に、鹿児島の方までですか、ネットワークがあるんですが、どのようにそのネットワークは広がっていったのか。お伺いしたいと思います。

山根／1点目の会議の頻度ですが、定期的に行っている会議は何回と言えますが、実は、突発的にやっている会議が、1日に2～3回くらいはあります。両者のミーティングがどう違うかというと、定期的に行っているミーティングは先程紹介しましたような朝のミーティングなどです。あとは共同住居ごとに住居ミーティングというのがそれぞれ週1回開かれていて、各住居の中で暮らしていて困っていることをみんなで話し合っています。例えば〇〇さんはゴミを散らかすとか、皿を洗わないとか、夜うるさいとか、そういうことを話すミーティングですね。そういうミーティングは実は週1回では終わらない事が多くて、突発的に〇〇さんがSOSを出して困っているといった場合はその場で緊急でミーティングが開かれたり、具合が悪くなったメンバーが、私を責める声が聞こえて、バカ、アホとか、どっか行ってしまえとか聞こえるなんて助けを求めてきたら、じゃあ応援ミーティングを開こうということでみんなで話を聞いてあげるのです。「どういうふうに聞こえるの？ どういうふうに苦しいの？」とか話を聞いてあげて、「あっ、それは僕もこういう体験があった」とか「それにはこう答えればいいよ」とか、「よく話してくれたね」とかいうようなミーティングが結構あります。それは1日に何回あるかというのは言えなくて、具合の悪い人が出たときなどに開かれます。

会場／それはいつ始まるというか、どうやってやるのですか？電話をかけるのですか。

山根／電話もありますが、作業所に電話がかかってきて「具合悪いんだけど」って言われたら「それなら作業所に来て」って言って作業所でやる事が多いです。あとは、住居でやることもあります。場所は特にそういう緊急ミーティングのときは決まっていませんが、やっぱりみんなが集まるたまり場、人のよく集まる所で行われる頻度が高いです。

会場／テレビ会議が始まるのは、どうやってはじまるのですか。

山根／テレビ会議の頻度ですが、テレビ会議は実は今べてるからは常時つながっぱなしの状態にしています。なぜかというところやってみるとわかりますが、普通の電話の場合は、電話をかけて相手が出てから話しはじめますが、テレビ電話だと相手を呼び出すために前もって連絡しておかなければならない。それだとなかなかTV会議は始まらないんですよ。1対1ならいいのですが、全国のあちこちいる人たちが一斉にその時間からTV会議を始めるのは難しいのでべてるではつながっぱなしにしています。テレビ電話のパソコンから「もしもし」と聞こえたらそのパソコンの前に行って話をするというわけです。会話の内容は「元気だった？」とか「九州は今日も半袖で暑そうだね」とかそんなものです。話が終わっても回線はそのままにしておいて、お互いの作業所が見える状態にして互いに席を外すだけのことが多いです。だから作業所同士がつながっているような感じとさえいいのでしょうか。以前は一回一回切っていましたが、何度も切ったりつないだりしているとめんどくさいのです。どうせ電話回線は定額制なので、めんどくさいからつないでおけということにして、設定も24時間までは連続してつなげるようになっていますが、さすがにそんなに長い間使っている人はいません。24時間つながっていてもしゃべっているのは1、2時間くらいです。2点目の全国にどうやって広げているかという話ですが、実はまだ全国展開という形では告知していません。1年目はテストということで、精神障害の作業所として古くから連絡をとりあっていた全国の作業所さんなどに声をかけて「じゃあ、やりましょう」といわれたところとつないでいます。来年度からはもっと一般に声をかけて、CD-ROMと解説書を送ればつながるようにしようと思っています。もうそういうCD-ROMや書類はできており、今は手続き上の問題と運営をどうやっていくかを話し合っているところなので、今後、拠点は増えていきます。実験段階で始めたところでしたが、今後は公の形で広げられると思います。

会場／ありがとうございました。

野村／よろしいですか？その他の質問があれば挙手をお願いします。

会場／川崎市中途失聴・難聴者協会の森と申します。河村さんにお伺いしたいのですが。私たちの障害は、難聴というので、聞こえが悪い。コミュニケーションをするときに、私は例えば、他地域の人とはインターネットでやりますが、自分の地域、川崎の仲間たちは、インターネットは全然受け付けない。ですからその場合、すべてFAXでやります。インターネットを使ってくれとありがたいと思う。そういう点で、インターネットがもう少し、ユニバーサルデザインになればいいなと思います。お伺いします。

河村／インターネットをもっと使いやすく、そしてアクセシブルであるようにというご意見だと思いますが、まったく同感です。今、すごく使いにくいと思います。特に、いちばん使いにくいと思うのは、キーボードを覚えないと、何もできない。あるいは、マウスの操作を画面のアイコンでマウスを操作していくのは、慣れないとなかなか操作しにくい。私が特に難聴者の場合、興味をもっているのは、今「べてるシステム」という名前ですが、べてるの家で山根さんが開発したテレビ電話のシステムです。そこに実は、文字も入れられるようになっていて、例えば、話をしているものをここで今日はパソコン要約筆記をしてくださっているチームがありますが、例えばどこか、山根さんのところは何カ所も同時につなげるシステムですね。

つないでいる所の一箇所がサポーターのいるサイトで、そこで例えば文字でサポートしてくださるとか。そうすると出張してこないでサポートサービスできるわけです。手話が必要な人には、そのどこか一カ所が手話通訳の画面になっていて、聞いて、手話で通訳していただく。その逆もそうですね。手話を見ていて、誰かが通訳する。インターネットを使ったりレaserサービスの様なものというのは、いろんな工夫ができると思います。それから、値段の問題があります。FAXはたくさんの情報を送るとすごく時間もかかるし、けっこうお金もかかると思います。ところが、インターネットの場合は、今、山根さんは24時間つながっぱなしと言っていたましたが、ずっと繋いでいても一定の金額しかかからないという契約がありますので、そういう中でFAXが必要な場面もまだまだあると思いますが、実際に便利なものを見せて、これが使えるようになると、だんだんみんな便利なものを使うと思いますね。特にタッチパネルをもっと使ったほうがいいかなと思っています。キーボードとマウスはなかなかわかりやすいようでわかりにくいので、タッチパネルがあって、「これ」というふうに誘導してくれる、そんなアプリケーションがもっともっとできると最初に使うときに難しいという問題が解決できて、一回そこを通り抜ければ便利だから使うという人がお互いにコミュニケーションがもっともってはかれるようになるのではないかな。特に高齢の方なんか考えるとキーボードを覚えてくださいというのはちょっと難しいと思いますが、それよりは、わかりやすい画面にタッチパネルで使えるようになってほしいと私は思っています。

野村／よろしいですか？

会場／市民コンピューターコミュニケーション研究会のハマダと申します。私もWSISのプロセスにNGOとして関わっています。今回の世界情報社会サミットは、これまでの国連のサミットと違う点として、専門技術、情報技術の問題というふうに理解されているために、なかなか一般の方々の関心を呼んでいないです。マスコミもほとんど報道しませんし、NPO、NGOの方々に呼びかけをしても自分たちの問題として認識して、一緒に参加しようというNPO、NGOはほとんどいないという状態です。これから2年後のチュニスのサミットに向けて、これを実りあるものにしていくためには、やはり一般の方々に情報とコミュニケーションの問題というのはこれからすごく大事な問題だということを認識していただくことがとても大切だと思います。でも、なかなかそれが実現できていないです。河村さんとして、そのために何か考えていらっしゃることはありませんか、教えていただきたいと思っています。

河村／おそらく一緒に苦労されているだろうと思うのですが、なかなかサミットと言っても、もともとサミットというのは元首たちが集まるものだというイメージがありますので、私たち1人1人が参加して、なにができるんだろうとまず思うわけですね。ところが実際、先程来山根さん、須田さんの感想を聞いていただくとわかるように行ってみると手応えがあるものだと思います。だからその行ってみるものの面白さというか、そこで得てくるものというのを実際に行くチャンスがあった人たちがもっと伝えることかなと思うんですよね。サミットの参加というのは、別に序列があって上の人だから参加するとか、あるいは点をつけて点の高い人が参加するということで、代表を選んでいくものじゃないと思います。特に市民社会からの参加というのは、この問題が自分に身近だと思った人は誰でも参加する資格があるし、権利があるし、行って何かを得てくることのできるだろうと思います。ですから、そういう意味で、もっと身近なところで、こう言っはなんです、どうせ海外旅行をするのなら、これに行っはうがおもしろいよ。ということは間違いのないのではないかなと思います。ですから少しそうやっ

て大勢誘って、日本だけから行っても面白くないので、普段なかなか会えない人たちと今度のサミットで交流会をやって会おうという企画を立てられたらいいのかなあと考えています。

野村／よろしいでしょうか。時間もなくなってしまいましたので…。講師の皆さんにそれぞれ、最後にお話をさせていただきます、先ほどの方がおっしゃったように一般の方の関心が低い、特に障害者の関心が低いです。私たちはリハ協として、ウェブでWSISについていろんな広報をしましたが、なかなか関心が呼べないというところに苦労がありました。また、例えば行きたいけどどうなのかな。と思っている人たちをひっぱっていく人たちがいるわけです。今回はそういう意味で河村さんがその役をやったわけです。ひっぱって行かれた人たちはどのようにこれから他の人たちをリードしていくのか、少しお話をいただければと思います。また、河村さんにはさらに多くの人たちが関わるにはどうしたらいいのかということ。それから、障害者の基本的な人権として、障害者アクセスというものがこれから広まっていくためにはどうしたらいいかということで、お話を最後にいただければと思います。それでは山根さんからお願いします。

山根／やはりこういうシステムをつくるにはお金が必要です。ベテランシステムもこのようにテレビ電話会議をするためには、サーバというパソコンの親玉のようなものが必要です。最初、これを浦河日赤のソーシャルワーカーの方と作業所同士をつないだコミュニケーションとれるシステムつくりたいねという話になって、あちこちに助成金の申請をしましたが、パソコンならわかるがサーバってなんだ、とことごとく断られました。中古のパソコンならあげられるけれどサーバというのは前例がないからだめだと言われて、半分あきらめていたところで日本財団さんが、おもしろそうじゃないですか、そういう先進的な試みは是非やってみてくださいということで、助成金を出してもらえて今回のテレビ会議等、デジタルアーカイブができました。そしてこれからはサーバというものが中心になっていないとテレビ電話できないということなどを知らせて行きたいと思っています。そして具体的な運用モデルとして接続数を増やして少しずつでもお金をいただいてシステム、サーバの使い方を確立させることもこれからは考えていかなきゃいけないなと思っています。

野村／テレビ会議のなかで今回の報告もしていただければとおもいます。それでは、須田さんと阿部さん。お願いします。

須田／最後、声が大きいから大丈夫だと思いますが、画像を見ていただき、非常に努力していることはおわかりだと思いますが、情報で私が何を伝えたいかということをおみなさんにお伝えしたいと思っています。それは、人として生きるということ。私の話のなかにあったと思いますが、自閉症の人たちは、知的に高い人から、全然知的にIQを数えることもできない人まで幅広くございますけれども、そういうことをしっかりと世界の中で意識してもらうため、それから、うちのけやきの郷は重い人たちがたくさん入所しておりますが、どんな自閉症の重い人もやればできるんだ、あきらめないで前向きにやってほしいと。それと同時にコミュニケーションの障害者であるという自閉症の人が、「ともに生活してともに働くこと」によって、対話によるコミュニケーションができないけれども、心と心が語り合うことができるということ、私はけやきの中で非常に感じました。ですから世界に向かって、これから私たちがしなければならないことは何かというと、重い人もあきらめないでほしいということです。また、良い環境を作ってあげればコミュニケーション障害を改善できるのだということを知ってほしい

のです。しかし、基本的にはコミュニケーション障害を抱えていることも事実です。でも、心と心はつながることができるんだということを、これからもっと成果をあげて皆さんに発信して、自閉症の人たちが、親たちが、あきらめないで前向きに生活して行くことを願って、これからけやきの郷としては情報をたくさん出していきたいと思っております。

阿部／自閉症についての基本的な問題、けやきの郷から何を発信していくかについては、須田さんから申し上げましたので、ちょっと観点を改めて申し上げます。

「心と心のコミュニケーション」――それこそが、コミュニケーションの基本であるとも思います。そういう意味では、自閉症の人たちを、単純に、「コミュニケーション障害」といつてしまってよいのだろうかという問題があるかと思います。その視点の上で、自閉症の人たち特有のコミュニケーションの在り方・支援を考えていくことが、今後必要なのではないのでしょうか。

しかし、「ことば」でのコミュニケーションの点では、実際には、自閉症の人たちには、やはりなかなか自分の思ったことを、特に「ことば」で表現・伝達するのがむずかしいという問題をもっております。そのときに、自閉症の人たちのコミュニケーションを助け、育てていくためのツールとして、つまり、コミュニケーション・エイドとしてICT機器の重要性が増えてくるのではないかと考えています。例えば、学校などで使われはじめているのですが、ボイスコミュニケーションエイド（VOCA）といったものがあります。これには、「おはよう」と言いたいときに「おはよう」のボタンを押すと「おはよう」という音声が出てくるというものがあります。これでコミュニケーションができると同時に「おはよう」という言葉を覚えられる。また、これは、アメリカで見た例ですが、言葉がまだ出ていない子どもに、「おやつに何を食べたい？」と教師が質問したとき、子どもが、コーンフレークやキャンディなどの絵の描いてあるVOCAの絵を押すと、「キャンディ」という音声が出る。自分の思っていることが相手に通じることによって、自閉症の人たちの世界がぐんとひろがり、思いが分かってもらえないことからくる不安・いらだちなども減り、自閉症の人たちが安心して暮らせることにつながるようになってくると思います。ICT機器が、ツールとして、そのように使われることも増えてくるでしょう。

それから、結構、自閉症の人にはメカに強い人もいます。そういう人たちが、ICT機器を使ってコミュニケーションをし、あるいは自分の余暇を楽しむことなど、生活を広げていくことも考えられると思います。また、パソコンでの検索も得意な人もいるので、それを発展させて、在庫管理、図書館の検索などの仕事につなげていっている人もいます。もちろん、自閉症の場合は、操作ができるといった能力の問題とは別に、自閉症特有の行動の問題があるので、ジョブコーチ、環境の整備といった条件もともに考えることが重要ですが。

また、KATCや、けやきの郷の支援センターもやっておりますが、ICTでの相談、研修、これも今後重要な分野になってくるでしょう。そのような意味で、けやきの郷の実践の発信を含めて、世界で、自閉症の人たちが、豊かに生きるための情報を発信し、共有化をしていくことが重要と思っております。

もう1つ、さきほども出ましたが、情報サミットのまさにメインテーマであるグローバル・フォーラム、これがどうして一般の関心が低いのかなと、私もつくづく痛感しました。というのも、私は前にTBSでディレクターをしており、そういう関係もあって、TBSから私に実はとりあげたいのだが、どういうふうに発信したらいいのかという問い合わせがありました。河村さんにうかがったりして、原稿をまとめて、TBSに出すと同時にNHKや3大紙にも出しました。ところが、あるところまではいきますが、やっぱり、ジュネーブまでいって取材を

するところまでは動いてはもらえなかった。それはなぜかという、河村さんもおっしゃっていましたが、本当の意味での情報社会サミットの意味が伝えられていなかったということ。W S I S の中心テーマの一つが social inclusion ですから、本来なら障害者のグローバル・フォーラムが中心になるべきであったという位置づけが、みんなに伝わっていなかったからだと思います。それをやるのは、これから私たち、行ってきた者の役目だと思っています。私は、須田さんもそうですが、日本自閉症協会で「いとしご」という情報誌を出しています。それに、何度にも分けて今度のことを発信したいと思いますし、そこから広げて、マスコミにも、情報を絶えず発信していきたいと思っています。

来年のチュニジアは、彼らに行ってもらいたい。そして、障害者の観点から情報を捉えなおすことの重要性を認識してほしいと思います。そのため、それぞれの立場で広げていければと思う次第です。

河村／来年、ぜひ、ここにいらっしゃる方のできるだけ大勢と一緒にいきたいと思っています。チュニジアのチュニスというのは地中海のリゾート地です。ビーチがあり、砂漠もあります。とにかくいいところだそうです。そこで思い切りいい空気を吸いながら、未来を語る。それから私が実は、私の横に並んでおられる3人の方とお会いして、それぞれ、私の目からウロコを落としてくださいました。必ず他にも大勢、目からウロコの方がいらっしゃることは承知しています。少なくともこの方々は、私の思い描く世界中から参加する人たちの目からウロコを落とす人たちだと確信したので、非常に無理をしていただいて、お二人には、帰って来てから20日間か具合悪かったと聞いて、申し訳なかった。でも本当にがんばって、ご発表いただいたと思います。ほんとうに、ありがたいと思っています。私は何人かから感想を聞きましたが、それぞれのご発表から大いに感銘を受けたと聞いていますし、ちょうど、一晚、レセプションがあり、いろんな方とお話をされる機会があったと思いますけれども、そこでも、非常に興味を持って迎えられたと実感しています。言ってみれば、今日来ておられる方ほとんどが、一人ひとりの「プロジェクトX」をもっているような方たちだと思います。「プロジェクトX」というのはたまたま、何万とあるなかのひとつがテレビにでるだけであって、テレビもその時、その時の視点で番組を選ぶのだと思います。今は、やはりあまり一般に知られていないが、でも実際、やっていることは、皆さんが積み重ねていることは、「プロジェクトX」にとてもおかしくないようなことばかりというふうに思います。その意味で、それを互いに横につないで、ノウハウを共有しあう、あるいは励まし合うというネットワークを強めてこそ、情報通信技術というのは意味があるのではないかと思います。

これから、私は研究所にいますが、できるだけ実践的な要請というものといつも身近にいながら、今度のサミットのような取り組みにも一緒に参加したいと思っています。ぜひ来年の11月には、みなさんも一緒に行くべく準備を進めていただければ、たいへんうれしいと思います。

野村／今日は貴重な報告をいただきまして、ありがとうございます。今回のいろいろな報告、いろんな障害者の方が集まったサミットで開催されたグローバル・フォーラムなど、とてもいろいろな報告がありまして、その辺のところは私どものウェブを見ていただければ詳細がわかるかと思います。そういったところから皆さんが関心をお持ちになって、その関心を他の人たちに分けていただければと思います。そして、来年2005年、多くの障害者の方が参加し、いや、参加しなくても日本でサミットを見守ってくれることを期待しております。今後ともよろしく願います。

閉会にいたしますが、その前に、私どものいろいろなものを入れた袋があります。ちょっと中を見ていただけますか。詳細をお知らせしたいと思います。こんなになが入っているんだろうと思っている方もいらっしゃると思います。CD-ROMが3枚あると思います。1つは、今回の資料です。いろいろな資料が英語で出されました。それを私どもの仮訳ですが、とりあえず翻訳をして、すべて日本語でCD-ROMに入れております。これがそうです。おうちに帰られて見ていただければと思います。それからもう一つ。マルチメディア・サンプルタイトル集というのがあります。私どもが推薦するDAISYでつくられたCD-ROMです。スタッフから簡単に説明してもらいます。

飯田／こちらのCDは、河村さんからもお話しいただいたDAISYフォーマット、アクセシブルな情報システムDAISYの中のマルチメディア・DAISY録音図書という、音と絵と文字がシンクロする録音図書がありますが、それが認知・知的障害者の方に役立つのではないかと、私たちの協会が促進してきました。平成15年度は、助成金を受けて、全国6カ所でマルチメディア・DAISYの研修会を福祉施設等で行いました。こちらのCD-ROMの中にはそこで受講してくださった方々の作品が入っています。もっとたくさんの作品を収録したかったのですが、著作権の問題で収録することができなかった箇所も多くありました。ぜひ家に帰ってから見ていただければと思います。

野村／これと一緒に資料編も入っていますので、見ていただければと思います。それからもう一つ、CDがあります。ディスアビリティ・ワールドです。これについて、少し説明をします。

有田／こちらは、ディスアビリティ・ワールドといいまして、WEB上のマガジンです。これを行っているのはアメリカの教育省とリハビリテーションインターナショナルがジョイントプロジェクトでウェブサイト上にマガジンを設けていて、私ども、日本障害者リハビリテーション協会から毎月1回いろいろなところを取材し、原稿を書いてもらって、日本の障害者の事情を英語で紹介しています。それに掲載されてから、今度は日本語と英語の両方で、当協会のウェブサイトにも掲載していますが、今回お配りしたCD-ROMは今までの2001年4月から2002年10月までの記事が全部載っています。全部で29個の記事です。私どもいろいろなところに取材に行きまして今日、お話いただいた山根さんのべてるの家にもお伺いして、初めてお会いすることができて、本当にいろいろな交流をこの記事取材することによって、することができています。毎月1回、これからは原稿を投稿して、記事はウェブサイトに掲載しますので、予告編としては、3月頃はおそらく河村さんにインタビューした記事がまず英語で載りますので、それをまた日本語で掲載しますので、そちらもご覧になって下さい。よろしくお願いします。

野村／私どもの情報センターからの報告でした。本日は長い間、こちらの報告会に参加いただきまして、ありがとうございました。今回は、要約筆記者、それから磁気テープ、点字プログラムもあります。それからこちらのCDには点字が貼ってあります。そういった情報保障をしていますが、まだまだ足りないところがあるかもしれませんが、私たちは情報保障と情報をアクセスすることが障害者にとって、基本的な人権であると考えています。今後ともよろしくお願いしたいと思います。ありがとうございました。

グローバル・フォーラム—情報社会における障害者

ハイライト(2003年12月12日)

DINFのURL <http://www.dinf.ne.jp/>

グローバル・フォーラム「情報社会における障害者」は2003年12月12日の午前9時30分から午後6時30分まで開催され、成功のうちに幕を閉じた。プログラムは様々な障害に対応し、印刷版、拡大印刷版、点字版、CD-ROMなどが用意され、またウェブ上でも提供された。フォーラムのあいだは手話通訳も行なわれた。参加者は、様々な障害のある人を含め約200人であった。

フォーラムは、オープニング・セッション、成功を収めた事例の紹介、全ての人のためのICT(情報通信技術)の設計と開発、クロージング・セッションと4つのセッションに分けられていた。

フォーラムは組織委員会を代表し、スイス視覚障害者図書館理事のバーナード・ハインザー氏の歓迎の辞により始まった。同氏の団体の好意で、原則宣言の草案、行動計画案などWSISの資料がDAISYフォーマットのCD-ROMで全てのWSISの参加者に配布された。

世界盲人連合(WBU)の会長であり、国際障害同盟の会長でもあるキキ・ノードストローム氏はオープニング・セッションで市民社会を代表し、基調講演を行なった。スピーカーのほとんどは障害当事者であり、そのことは情報社会におけるICTについて彼らの声を届けることができたということにおいて、非常に重要な意味を持つことになった。

(プロフィールと講演の要約は以下のURLに掲載。)

http://www.dinf.ne.jp/doc/english/prompt/031215_3wsis.html

クロージング・セッションでは、河村宏氏が議長を務めるディスカッションの後、「アクセシブルな情報社会に関するジュネーブ宣言」がグローバル・フォーラムによって採択された。河村氏は市民社会局の障害者グループの中心的役割を果たしてきた。宣言は以下である。

アクセシブルな情報社会に関するジュネーブ宣言

- ・我々は情報社会が21世紀とそれに続く未来にわたり、文明の方向性と発展性を決定することを認識し、
- ・情報社会に対し確固たる信念を持ち、情報及びコミュニケーションへのアクセスは基本的人権であると明言し、
- ・障害者、特に発展途上国における障害者は最貧困層であり、情報及びコミュニケーション技術から孤立し、新しい先端のICTの恩恵を受けられずにいることに留意し、
- ・点字、手話、触手話、地域の言語による読みやすい資料、文書ではないシンボル・システムやその他の支援機器が障害者の情報及びコミュニケーションに欠かせないことを認識し、
- ・オープンソース・ソフトウェア及びハードウェアの開発など、情報社会の包括性と持続性の決定に役立つ重要な問題に対し、政府や民間企業から充分な関心と支援を得られていないことを懸念し、
- ・障害者のニーズと要求がWSISの文書で見られたように、政府、市民社会から認知し始められたことを評価し、
- ・しかしながら、ジュネーブでのサミットにおいては、サミットの情報が代替フォーマットで開催に間に合うよう提供されなかったり、点字プリンター、合成音声、手話通訳などのサービスの不足、また6億人以上の障害者の問題を適切に取り組む内容が欠落していたりと、障害者のニーズを完全に満たしてはいなかったことに遺憾をもって留意し、
- ・ICT開発のプロセスを通し、消費者、パートナー、貢献者としての障害者の活発な参加が、包括的な情報社会の形成に重要であることを認識し、我々は、世界情報社会サミットにおいて開催されたグローバル・フォーラム「情報社会における障害者」の参加者として、団結して以下のことを宣言する。

1. 障害者はいかなる障壁、偏見、差別からも解放され、情報社会のあらゆる側面において完全参加の権利を持つ。
2. 各政府の法律及び政策は、障害者のニーズと権利を満たすフォーマットで情報、コミュニケーション及びICTへアクセスできるという基本的人権を保障しなければならない。
3. 情報、コミュニケーション及びICTの内容は情報社会を形成するのに重大な役割を果たすので、政府、企業、市民社会はユニバーサルデザイン、支援技術及び拡大技術を活用し、あらゆるタイプの障害を持つ人にアクセシブルにしなければならない。
4. ICTを通して得られる情報や知識は、障害を持たない人と同時に、また追加の費用を負担することなく、障害者に提供されなければならない。
5. 知的所有権保護、著作権法及びデジタル権利管理（DRM）システムを含む、いかなる社会的な基準、規則、法律/政策も障害者の情報及びコミュニケーションへのアクセスを危うくするものであってはならない。
6. 情報社会は、障害者にとってユニバーサルで、オープンで、独占的ではなく、アクセシビリティが証明された実績をもつ、すなわちプラットフォームに依存しない、情報、コミュニケーション及びICTスタンダードを採用し、それに従うべきである。

7. 21世紀の目標である貧困の緩和に一致し、情報社会において財源が不足している人々のインクルージョンに帰するイニシアチブを開始しなくてはならない。
8. 支援技術、文書、トレーニング、技術的支援が、地域の言語で分かりやすい形で、提供されなくてはならない。
9. 年齢、性別、原住民、地理的孤立、経済的障壁、教育が受けられないこと、障害に対する偏見などによる多くの障壁に配慮しなくてはならない。
10. チュニスで開催される第2回 WSIS の準備として、主催者は障害者とその団体を参加させなくてはならない。
11. プログラムと内容は世界中の6億人以上の障害者のニーズを反映させるべきで、手話、点字及び代替フォーマットなど障害者のコミュニケーションのニーズを考慮し提供しなければならない。
12. ジュネーブからチュニスまで全ての WSIS のプロセスにおいて、障害者の完全参加のために、あらゆるコミュニケーションの障壁に取り組み、また取り除くべきサービス、すなわち代替フォーマットの資料が得られるリソース・センター、アクセシブルなインプット及びアウトプットができるコンピューター、合成音声、アクセシブルなキーボード、点字プリンター、手話通訳者、その他のリソースなどが得られるようにする必要がある。

サミットの成果

今回のサミットでは原則宣言と行動計画が採択されました

原則宣言草案（仮訳）

<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prompt/031217wsis.html>

行動計画（仮訳）

http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prompt/031217_2wsis.html

市民社会宣言（仮訳）

http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prompt/031217_3wsis.html

Geneva Declaration on Accessible Information Society

Recognizing that the information society will determine the direction and development of human civilization throughout the 21st century and beyond;

Stating, with firm belief in the Information Society, that access to information and communications is a fundamental human right;

Bearing in mind that persons with disabilities, especially those in developing countries, are the poorest of the poor, leading to isolation from information and communication and exclusion from the benefits of new and emerging ICTs;

Realizing the importance of existing tools such as Braille, sign languages, tactile sign languages, easy-to-read materials in local languages including those without written scripts, symbol systems and other assistive devices as vital for persons with disabilities to meet their information and communication needs,

Noting with concern that several key issues which can help determine the inclusiveness and sustainability of the information society, such as open source software and open hardware development, are not receiving enough commitment and support from governments and private sectors;

Noting with appreciation that the needs and requirements of persons with disabilities are beginning to be recognized by governments and civil society as shown in the WSIS documents;

But, noting with regret, that the summit in Geneva has not yet sufficiently taken the needs of persons with disabilities into account as demonstrated by the absence of timely summit information in alternate format, facilities such as Braille printers, synthetic speech, sign language interpreters and the absence of content that adequately addresses issues of more than 600 million persons with disabilities;

Realizing the importance of active involvement of persons with disabilities as consumers, partners, and contributors throughout the process of ICT development which will help shape the inclusive information society;

We, participants of the Global forum on Disability in the Information Society, held during the World Summit on the Information Society declare in solidarity that:

1. Persons with disabilities have the right to full participation in all aspects of the information society, free from all types of barrier, prejudice and discrimination;
2. Legislation and policies at all levels of government must ensure the fundamental human right of access to information, communication and ICTs for persons with disabilities in formats that meets their needs and their rights;
3. As content of information, communications and ICTs play a crucial role in shaping the information society, Governments, Businesses, and Civil Society must make them

accessible to persons with all types of disabilities, using Universal Design and assistive and augmentative technologies;

4. Access to information and knowledge through ICTs must be available at the same time and at no additional cost for those with disabilities as compared to those without disabilities;
5. Any social norms, rules, legislation/policies including intellectual property rights protection and copyright laws or Digital Rights Management (DRM) system must not compromise the fundamental right of access to information and communications for persons with disabilities;
6. The information society should adopt and follow information, communications and ICT standards that are universal, open, non-proprietary, platform independent with a proven track record of accessibility for persons with disabilities;
7. Consistent with the millennium goals for poverty alleviation, initiatives must be undertaken that result in the inclusion of people lacking resources in the information society;
8. Assistive technologies, documentation, training, and technical support should be made available in easy to understand local languages for persons with disabilities;
9. The information society must take into account many barriers associated with age, gender, indigenous peoples, geographic isolation, economic barriers, lack of access to education and social prejudice associated with disability;
10. In preparation for the second WSIS in Tunis, the organizers should include persons with disabilities and their organizations in the preparation;
11. Programs and content should reflect the needs of more than 600 million persons with disabilities in the world, and that deliberation should provide for communication needs of this population such as sign languages, Braille, alternate formats, etc;
12. In all WSIS processes from Geneva through Tunis, facilities should be made available for the full participation of persons with disabilities, including resource centres with materials in alternate formats, computers with accessible input and output devices such as synthetic speech capacity, accessible keyboards, Braille printers, sign language interpreters and other resources to address and eliminate the variety of communication barriers;



本書の内容はD I N F（障害保健福祉研究情報システム）のホームページでも参照することが出来ます

<http://www.dinf.ne.jp/>（日本語）

http://www.dinf.ne.jp/doc/english/index_e.html（英語）

国連世界情報社会サミット 報告会

報告書

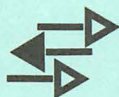
2004 年 5 月 20 日 初版

発行所 財団法人 日本障害者リハビリテーション協会 情報センター

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング二号館 7 階

TEL: 03-5909-8280, FAX: 03-5909-8284

(c)2004 Japanese Society for Rehabilitation of Persons with Disabilities (JSRPD)
All Rights Reserved.



●情報のアクセス問題

Challenges of Information Accessibility

情報のアクセシビリティに関する先進的な情報を紹介



●国際機関等に関する情報

International Organizations

国連等の国際機関の資料・情報を掲載

TWDGC

●障害問題作業部会

TWDGC:Thematic Working Group on Disability-related Concerns

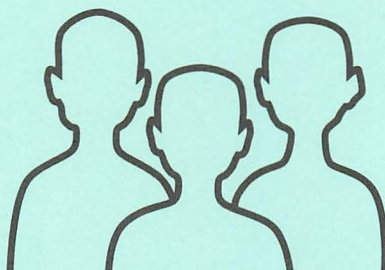
国連アジア太平洋地域障害問題作業部会
(TWDGC)の活動の紹介



●研究・調査

Research Resources

国内外から研究・調査文献を
分野別に掲載



DINF

DINF（障害保健福祉研究情報システム）は
障害者の保健と福祉に関する研究を支援
する情報を広く収集し、提供するサイトです。

<http://www.dinf.ne.jp>



●会議・セミナー

Conferences

全国で開催された会議・セミナーの報告書を提供



●計画・通知

Laws and Legislation

障害に関する法律・計画・通知を収集



●逐次刊行物

Periodicals and Press

「ノーマライゼーション」他当協会発行の逐次刊行物の紹介

●DAISY関連情報

DAISY:Digital Accessible Information System

DAISY（アクセシブルなマルチメディア情報システム）に関する
情報の提供

●その他

Other Information and Resources

日本発障害者事情レポート等を紹介

財団法人 日本障害者リハビリテーション協会 情報センター

〒160-0023 東京都新宿区西新宿3-2-11 新宿三井ビルディング2号館 7階 TEL:03-5909-8280 FAX:03-5909-8284

財団法人日本障害者リハビリテーション協会 情報センター

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング二号館 7 階
Japanese Society for Rehabilitation of Persons with Disabilities, Information Center
7F Shinjuku Mitsui Building No.2, 3-2-11, Nishishinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 160-0023
TEL: 03-5909-8280, FAX: 03-5909-8284